第１２５号

芥川だより

発行日＊＊＊2017年６月１日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明
発行所
☆ 着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町2 －１４－3
TELO７２－６８１－８８７０

＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部1００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ああ、人間という奴は～

朝夕に散歩する遊歩道のことである。猪名川の遊歩道は対岸の西に六甲連山、正面に箕面の山が連なる気持ちのよいところである。さあ、今日も頑張ろうと歩き始めてすぐにおかしなものを踏んだ。振り返ってみれば犬のフンだ。ああ、またやった「なんで道の真ん中にほったらかしておくんだ！飼い主は何を考えているんや」と怒りがこみ上げてくる、気持ちが一気に暗くなってしまった。

私が、遊歩道を毎日歩き始めたのは退院後だから 4 年ほど前である。その時から犬のフンが同じ場所にいつも落ちていた。同じ犬が毎日するのだろう、飼い主は知らん顔して散歩させているのだ。なんという奴だ、見つけて注意したい想いを 2 年ばかりさせられた。その後しばらくは犬のフンが落ちていないから気分よく過ごしていたのだが、昨日また別の犬と思える大きなフンが道の真ん中と道脇にいくつも落ちていた。踏みつけた跡もある。ああ、何ということだ。飼い主の鈍感さ無神経さに腹が立つ。

犬と散歩する人は水とナイロン袋を持って歩いているが、誰一人として道に落ちているフンを拾おうとはしない。ゴミ拾いをする人はいても犬のフン拾いをする人は見かけない。

ある時、私は気づいた「そういうお前も拾おうとしないではないか。人に文句を言う前にお前がしたらいいじゃないか」という自分がいた。それでも、私は文句を自分でいいながら犬のフンを見ながら毎日歩いている。おのれのふがいなさをなじり乍ら歩いている。

人は自分の世界で生きている。自分の飼い犬であれば家族みたいに可愛がるが、他人の犬は外の別世界と割り切って無関心を装う。この世の中には、これに似たような事が多い。個人的な世界が社会の一部だとなかなか理解しにくいから、別の世界のように考えてしまう。犬のフンも個人の世界と社会との隙間に落ちているようなものだから誰も始末しようとしないのだろうか。

死をめぐるあれやこれ（33）

石川　吾郎

夜啼く鳥は

六月になり梅雨の季節になると、夜に啼く鳥が気になってくる。むろんホトトギスのことだ。私がこの声を初めて聞いたのは、大学に入って京都で下宿生活をはじめたころ。ホームシック気味で、不安とうつうつとした気分で過ごしていた時期、真夜中を過ぎたころに、その声は突然かすかに聞こえてきた。テッペンカケタカと言われるように独特の啼き声は、すぐにそれとわかった。

高校時代に好きだった古文の教科書の中だけで知っていたホトトギスが実際に啼いているのだ。東山にほど近い北白川の北向きの、開け放した二階の安下宿の窓から聞こえてくるその声には、感動したものだった。その後幾度かこの下宿で啼き声を聞いたと記憶しているが、その後人生の荒波の中で、そのような記憶もかき消されていた。

そして四十年ほども経ち、京都の北郊に住まうようになり、夜更かしをする子供から夜中になると鳥の啼き声が聞こえてくると言われて、初めて気が付いた。確かにそれは、ホトトギスだった。遥かな記憶が湧いて出てきた。しかし最近の三年ほどは、これを聞いていない。どうなっているのだろう。

夜啼く鳥の啼き声は、私の胸にある種のざわめきを湧き起こす。このざわめきは、安倍政権によって、今の日本がファシズムの支配する恐怖社会へと、造り替えられつつあることを実感するたびに、わき起こる胸のざわめきなのだ。そして、我が子はそのような私の気持ちを理解していない・・・。

芥川だより一二五号　目次

		ページ
巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
みんなで知ろう日本の危機 22	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳 39	坂本一光	6
哲学屋のつぶやき 35	祖蔵哲	7
大峯奥駆道 10	梵店主	9
おっちょこチョイぼけ 50	ＡＯ	10
大人の今昔物語 34	石川吾郎	11
Ｂ級サラリーマン渡世譚 47	明石幸次郎	12
オクラの山たより 9	困了生	13
我がおくのほそ道の旅 6	成瀬和之	18
米国紀行 6	河原林成行	19
美しい「花」がある	大江雉兎	20
孫ウォッチング 18	福田圭	21
編集後記	嘉	21
女90年の軌跡	眞糀	22
俳句	土田裕	22
	影山武司	22

みんなで知ろう日本の危機（22）

安倍政権の身びいき腐敗と、私物化されるこの国

伊藤　明

この文章が印刷されて、皆さんの目に触れるころには、共謀罪法案は成立してしまっているのでしょうか。もし成立してしまったならば、今後のわが国の社会にじわじわと重大な影響を与えてくるものと考えられます。ぜひこの流れを変えて行かなければなりません。

ここになって明らかにされてきた安倍政権の身びいき腐敗に司法・犯罪捜査支配、それをごまかすためのウソと個人攻撃。これらをエスカレートさせる共謀罪。日本の国を破壊し尽くそうとする安倍政権の醜い姿がますます明らかになってきています。

■ファシズム：安倍政権はすでにファシズムと診断

先月号のこの欄で、安倍政権がほとんどすべてのファシズムの特徴を兼ね備えている、つまり安倍政権はすでにファシズム政権といっていい、ということを書きました。これは「アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館」に掲示されてある、政治学者ローレンス・ブリット氏が指摘しているもので、彼が示したファシズムの特徴は次のとおりです。

①強力で継続的なナショナリズム
②人権の軽視
③団結の目的のため敵国を設定
④軍事優先（軍隊の優越性）
⑤はびこる女性蔑視
⑥マスメディアのコントロール
⑦安全保障強化への異常な執着
⑧宗教と政治の一体化
⑨保護される企業の力
⑩抑圧される労働者
⑪知性や芸術の軽視
⑫刑罰強化への執着
⑬身びいきの蔓延や腐敗（汚職）
⑭詐欺的な選挙

この『芥川だより』先月号で、この一つ一つの項目を検討していますので、そちらを見て頂けると幸いです。

この一ヶ月の政治の動きをみていると、まさに「安倍政権はファシズム政権」という感をさらに強くするものです。権力をかさにきた、道義的・人間的に許せない堕落した行状を重ねているのです。そしてさらに、安倍政権はこの十四項目以上のことをしています。それは、

・司法を支配し検察や裁判所に不正な判断をさせる。
・また官僚トップの人事を支配して不正を行い、証拠を隠滅している。
・権力に不都合な人物に対する執拗で悪質な個人攻撃する。

という暴挙です。

今月取り上げる問題は、主に次の三つです。

◆共謀罪、国会で審議：国連の懸念：特別報告者の警告。政府の抗議。
◆加計学園問題：前川氏の記者会見、政府の個人攻撃
◆そして、一つの「準強姦事件」。山口敬之・準強姦事件：被害女性の記者会見、捜査不正の疑いが濃厚。

これらを取り上げる前に一つのニュースを示します。財務省は森友学園問題で、安倍昭恵総理夫人が関与していることをうかがわせる資料の国会提出を、「その資料が不存在だ」として拒否をしてきました。ところが六月一日をもって、五二億円を掛けて財務省内のパソコンシステムの入れ替えをしたと報じられました。これに伴ってコンピュータの中にあった、これらの証拠資料をもろともに葬り去ってしまったというのです。システムを入れ替えても通常はハードディスク内のデータは消去せずそのまま残すはずですが、報道では消去をしてしまったと発表されています。何と卑劣で姑息な財務省なのかとあきれます。

これに対してあるＮＰＯが、証拠資料の保全申し立てを行っていましたが、裁判所はこれを却下してしまったというのです。まさに司法も、安倍政権の支配下に入ってしまっていることを意味しています。

六月初め現在では、共謀罪法案が衆議院を通過してしまい、参議院での審議に入っています。一方で安倍首相が関与している疑いが強い加計学園問題がいよいよ国会でとりあげられ、文科省のトップであった前事務次官の証言が飛び出しました。しかしこれも、安倍政権は、これも森友学園問題とともにうやむやのうちに闇の中に葬り去ろうと画策し、文字通りの「陰謀」の数々を張り巡らしています。

そんな中一つの性犯罪のもみ消しに、警察当局に不当な力が働いた疑いが出てきました。これは政権を揺るがすほど大きな問題なのですが、不思議なことにマスコミ各社はこれをまともにとりあげようとしていません。

■山口敬之 準強姦事件」もみ消し

「強姦」という、ショッキングな事件は、正直ここであまり扱いたくないのですが、この事件は政治的に非常に重要な内容を含んでいますので、まず最初に取り上げます。

テレビのワイドショウが好みそうな話題なのですが、今のところほとんど取り上げられていないのです。このことが、この問題の深刻さを物語っているのです。

昼のワイドショーをご覧のみなさんには、山口敬之という人物はすでにおなじみかも知れません。田崎史郎（安倍首相と寿司屋で会食を重ね、安倍首相弁護のコメントしかしないコメンテーター。田崎スシローと呼ばれる）と同じ立ち位置の人物で、「総理に最も媚びを売る男」とも言われ、一時昼のテレビに頻繁に出演をして、安倍氏の応援コメントを垂れ流していた人物です。さらに安倍首相を褒め称える本を出版する、という安倍氏に非常に近い人物なのです。この男に「準強姦逮捕状」が出ていたと報道されました。

そのレイプ被害者である女性本人(！)が告発し、霞が関の司法記者クラブで会見を行ったのです。レイプの被害者の女性本人が公開の場で記者会見を行い、レイプ被害を証言する、ということは例外中の例外といっていいでしょう。

その被害女性（詩織さん）の証言によると、彼女が被害を警察に届けたが、警察は当初相手が有名人だということで被害届けを受け取ることさえ拒んでいた。その後逮捕状が発行され、山口氏が当時滞在していたアメリカから帰国するのを、捜査員が成田空港待ち構えていたところ、突然山口氏は逮捕を免れたというのです。捜査員からの電話によると『いま、目の前を通過していきましたが、上からの指示があり、逮捕をすることはできませんでした』『私も捜査を離れます』という内容のもの」だったと言います。

このいきさつは、不自然で納得がいかないもので、何か警察の上層からストップがかかったことをうかがわせるもの。つまり安倍氏の応援をテレビのワイドショウなどのマスコミで繰り返す男の「レイプ」という卑劣な犯罪が、（首相周辺と考えられる）権力の圧力によって不当にもみ消された可能性が高い、という許し難い事件なのです。

「『警察のトップの方からストップがかかった』という話が当時の捜査員の方からありました。『これは異例なことだ』と。当時の捜査員の方ですら、何が起こっているのかわからない」と女性は語っています。

その後、山口氏は準強姦罪で書類送検こそされたものの、その後、不起訴処分にされています。検察側はただ「嫌疑不十分」と言うだけで、詩織さん側に詳しい説明はまったくなかったといいます。このあまりに不可解な捜査当局の動きから安倍官邸による介入が疑われているのです。

このニュースについては、実にワイドショーが飛びつきそうな話題であるにも関わらず、取り上げているマスコミはごく一部です。この事件が一部の週刊誌で報道されるようになってから、それまで頻繁にテレビのワイドショーに出演して安倍応援のコメントを繰り広げていた、この山口敬之なる人物は、それ以後姿を隠してしまっています。

詩織さんはその後、検察審議会に不起訴処分の不当性を訴えています。今後、検察審議会が不起訴処分を取り消し、起訴するかが注目されます。

この問題は、森友・加計学園問題で浮き彫りになったのと同じく、安倍政権の身びいき不正・腐敗の構造がみえてくるものです。マスコミ記者に向かって、詩織さんは「今回、この件について取り上げてくださったメディアはどのくらいありましたでしょうか？」と語りかけ、「この国の言論の自由とはなんでしょうか？法律やメディアは何から何を守ろうとしているのか、と私は問いたいです」と述べています。

さらに驚くべきことは、この件で山口敬之氏の逮捕状の執行を止め、レイプ事件をもみ消したのが菅官房長官の「片腕」と言われた元秘書官であった警視庁・中村格刑事部長だ、ということが明らかにされています。この中村格という人物は、菅官房長官の秘書官の時代に、「報道ステーション」でコメンテーターの古賀茂明氏が「私はＡＢＥでない！」というフリップを出したことに激怒して「万死に値する」とテレビ朝日に猛抗議をして、古賀氏を報道ステーションから降板に追い込む、ということをした人物だということです。

さらに驚くことには、この人物の現在の役職は、警察庁の組織犯罪対策部長。つまり共謀罪摘発を統括する予定の役職なのだ、ということなのです！つまり「あった犯罪をなかったことにした男が、今度は、ない犯罪をあったことにする」立場になるという悪夢のような話しなのです。

性的暴行という犯罪は究極の女性差別で人権侵害です。この卑劣な犯行を犯人が首相にごく近い男だという理由で、権力自身が不当に犯罪のもみ消しをするという腐敗構造は、決して許せないものです。

この事件の報道をマスコミが報道を避けている点も、大きな問題です。共謀罪で権力に都合の悪い人間を恣意的に検挙できるようになる一方、政権に近い人間であればレイプをしても逮捕されない。まさに、法治国家の根幹を揺るがす事態が進行している。メディアと野党はこの問題を徹底的に追及しなければなりません。

■共謀罪について

共謀罪法案（テロ等準備法案）については、国会の審議によって、テロには無力で、国民を監視する目的であることが明らかにされています。共謀罪では、人権・環境団体もその対象となると金田法務大臣も認めています。もうこれはテロ対策でなく本物の治安維持法です。反原発や

野鳥観察も対象、更に日弁連も対象になる可能性がある、恐ろしいものだということが明らかになっています。

作家の平野啓一郎氏は次のように述べています。**「問題は、犯罪を計画し、共謀していることが、なぜわかるのか、という点である。**日本弁護士会は、「共謀罪を実効的に取り締まるためには、刑事免責、おとり捜査（潜入捜査）、通信傍受法の改正による対象犯罪等の拡大や手続きの緩和が必然」と指摘する。つまり、**警察に法外な捜査権限を与え、国民を日常的に監視する以外にない**のである。起訴されずとも、家宅捜索され、逮捕されるだけで、プライバシーは丸裸にされ、社会的な信用は失墜する。現実的には、その抑圧的効果こそが懸念されている。」

フランスのルモンド紙は次のように報じています。

「人権擁護のための諸団体、弁護士、ジャーナリスト、学者たちの組織は、現行の法律で国連の協定批准には十分であるとしている。彼らはこの法律が反政府的な活動にかかわるすべての市民に対する恣意的な監視を合法化するという隠された目的のためのものであることを懸念している。この分野については、警察はすでに十分な裁量権を享受している。

憲法学者飯島滋明はこの法案のうちに「憲法の三大原則、人権の尊重、平和主義、国民主権」に対する脅威を見ている。法案は一九二五年の治安維持法を想起させる、と飯島氏は指摘する。」「安倍首相が提出した法案は訴追できる二七七の犯罪リストを含んでいる。その多くは知的財産権侵害や許可なしの競艇参加とか国有林での植物伐採のようなテロリズムとの関係が見出し難いものである。法務大臣金田勝年は地図と双眼鏡を携行して公園を訪れた人間もテロ準備の容疑者となりうるとまで述べた。」とルモンド紙は伝えています。

こういった不安ないし懸念が、先進国の中では世界標準だと考えられます。

◆さらにこの共謀罪法案の危険性について、国連も不安を感じていて、懸念の表明が連続して出ています。

・第一には、国連のプライバシーについての特別報告者ジョセフ・ケナタッチ氏は『「計画」と『準備行動』を構成するものの定義の曖昧さゆえに、法案が恣意的に適用されるリスクに対する懸念」を明らかにした。氏はまた「テロリズムとも犯罪ともいかなる関係も見られない」犯罪のリストが含まれていることに疑義を呈し、「プライバシーと表現の自由の保護に対する不適切な抑圧」のリスクを指摘している。ということです。

しかし菅官房長官はこの書簡は「まったく不適切であり、われわれは厳重に抗議する」と反論していますが、この反論自体が、不適切で、誤解に満ちていると海外からも考えられています。「なぜなら日本は他のことについては国際法の順守をこれまで強く訴えてきていたから」とは、ルモンド紙の指摘です。

・第二には、国連の人権理事会の任命する特別報告者であり、表現の自由を担当するカリフォルニア大学教授のデービッド・ケイ氏が、日本の表現の自由についての調査結果をまとめた報告書を公表しました。この中でケイ氏は「日本ではメディアに対し、政府当局者からの直接的、間接的な圧力がある」などとしたうえで、日本の民主主義をさらに強化するためだとして、六つの分野で勧告をしています。この中では、「メディアの独立性を強化するため、政府が干渉できないよう法律を改正すべきだ」として、放送法を一部（第四条　放送の政治的中立性）見直すことなどを求めたほか、「慰安婦問題などでは、歴史の自由な解釈が行われるよう、政府が教科書の内容などに干渉するのを慎むべきだ」としています。

また、特定秘密保護法については、「安全保障の支障とならないかぎり、公共の利益にかなう情報を広めた人が処罰されないよう、新たな規定を盛り込むべきだ」としています。

これに対しても日本政府は「事実の誤認や不確かな情報に基づいて勧告している」などとして、報告書の内容を見直すよう求める文書を人権理事会に提出しました。

さらにデービッド・ケイ氏は来日し、六月二日に東京都内で記者会見をして、対日調査結果について「メディアの独立性が重大な脅威にさらされている」と述べ、日本の報道関係者が政府から直接・間接的な圧力にさらされているとの認識を示したと報道されています。ケイ氏の報告書は、六月十二日にスイスのジュネーブで開かれる人権理事会の会合で議論されるということです。

また産経新聞はケイ氏の報告に対して、国連を「反日」呼ばわりし、特別報告者を個人攻撃する記事を書きました。

◆日本政府は、グテーレス国連事務総長もＧ７での懇談で「人権理事会の特別報告者は、国連とは別の個人の資格で活動しており、その主張は必ずしも国連の総意を反映するものではない」と語ったと発表していますが、グテーレス氏は、これを否定し「特別報告者による報告書に関し、特別報告者は人権委員会に直接報告する、独立した専門家である」と語ったということです。つまり**日本政府は、政権に都合の悪い、国連事務総長の言葉も歪曲して国民に伝えて、デマ宣伝を繰り広げている**、と言うことです。

◆金田法相は六月二日の衆院法務委員会で、日本共産党の畑野議員から戦前の治安維持法への認識を問われ、「歴史の検証は専門家にゆだねるべきだ」と答え、さらに、**治安維持法犠牲者の救済と名誉回復を求めた畑野氏に対し、「（同法は）適法に制定され、勾留・拘禁、刑の執行も適法だった」とし、「損害を賠償すべき理由はなく、謝罪・実態調査も不要だ」と答弁**しました。

戦前の暗黒政治とその中核で国民の思想・内心を徹底的に弾圧、統制した治安維持法への全く反省を示さない発言であり、治安維持法を是認する重大な発言です。

このような認識の安倍政権の下で共謀

罪がこのまま成立させられるとするなら、これが「平成の治安維持法」と言われるそのままの役割を果たすことになってしまいます。この共謀罪は、日本の社会を監視と密告の社会へと造り替え、ひいては戦前の「暗い谷間の」日本社会へと逆戻りさせてしまうのです。

■加計学園問題

この記事で、これまで加計学園問題の存在を度々指摘してきましたが、ようやく五月になって、国会でこの問題に焦点が当てられるようになってきました。

詳細な経過は述べられませんが、要するに国家戦略特区の制度を悪用して、安倍首相の親友が経営する加計学園に、五十年以上認められてこなかった獣医学部の新設を不当に認可した問題。この経過には他にもっと適任のライバルの大学（京都産業大学）があったにもかかわらず、それを途中で立候補できないような条件が追加され、結果加計学園だけが申請可能にしています。このいきさつには、安倍首相本人ないし首相官邸からの指示・指令というものがあった可能性が濃厚である、というものです。

そこに文科省の前事務次官・前川氏が、積極的にいくつかのメディアでインタビューを行い、「政権トップのご意向」「官邸の最高レベルが言っていること」とする文科省内の文書が存在して、しかもこれらの文書が文科省内で共有されていたものであり、この文書は本物で実在の文書であることを証言したのです。実際NHKニュースで「これらの文書が実際に存在して、文科省内で共有され、部内のだれもが読める状態になっていた」と複数の職員が証言をしているということを報道しています。

加計学園の獣医学部の新設認可に内閣府・首相官邸から圧力がかかっていたことが、ますます確実性をもって明らかにされてきています。しかし国会で追及されても、政府側・菅官房長官は「怪文書」だと否定し、文書の存在に対しておざなりな調査をするだけで「存在を確認できなかった」「これ以上調査をする予定はない」と逃げるばかりです。これだけ証拠が揃った段階になっても、松野文部科学大臣は、「入手経路が明らかにされておらず、改めて調査を行うことは考えていない」と答弁しています。具体的な証拠があるのに、入手経路を明らかでなければ答えないというのは、違法・不当な業務執行を内部告発する公益通報や、ジャーナリズムを全否定するものであり、また国民をバカにしていることに他なりません。

また「国会で証人喚問があれば受ける」と前川氏が言明しているにもかかわらず、与党はこれを拒否し続けています。さらに醜いことに**政府・菅官房長官は、前川氏についての個人攻撃・人格攻撃を展開しました。**前川氏が文書の存在を明らかにするインタビューの直前に、読売新聞は前川氏が「出会い系バー」に出入りしていたといった人格攻撃の記事を掲載するという暴挙をしています。これは明らかに政府関係からの情報リークであり、犯罪性もない一私人のプライバシーを暴露するという、新聞としてはあるまじき卑劣な行為といえます。読売新聞は、五月三日に憲法九条に第三項を追加して自衛隊を憲法上に明記するという安倍氏のインタビューを掲載して、安倍氏の太鼓持ち的立ち位置を鮮明にしたところですが、まさに読売新聞らしい低級な記事と言えそうです。

これだけの証拠が出てきた以上、事態の核心を知る前川喜平前文科事務次官に加えて、加計孝太郎（加計学園理事長）、和泉洋人首相補佐官、木曽功内閣官房参与（加計学園理事）の証人喚問がぜひとも必要です。

六月五日の参院での答弁を終えた、**安倍首相の次のようなヤジ**がテレビで放映されました**「くだらない質問で終わっちゃったね　また」**と。これほど国会と国民をバカにした言葉はありません。

◆国家戦略特区の問題

加計学園問題の発端となった「国家戦略特区」の制度そのものが「岩盤規制」をこじあけるなどと唱えていても、これは**首相のトップダウンで身内へ不正な利権誘導の目的のために決められたもの**と考えられます。この「岩盤規制」と自民党政府が言いつのる各種の規制は、その**規制の多くは日本国民の生活と国の富を守るために存在しているもの**だ、ということを国民は認識しておく必要があります。郵政民営化など「規制改革」の多くは、日本の国民の財産をグローバル企業に流していくための仕組み作りなのだという認識を日本国民は持つ必要があります。そしてここにも諮問会議の主要メンバーとして政商・竹中平蔵（パソナ取締役会長・オリックス社外取締役）が登場しているのです（前回紹介した「種子法廃止」にもそれが言えます）。

◆官僚を支配する内閣人事局

国会の中継を見ていると、答弁に登場する官僚のトップたちが、これほどまでに安倍内閣の文字通り手足となり、重要な情報を隠す姿勢を貫く（とくに財務省のトップ）のが異様に見えてきます。つまり高級官僚たちが、すべて内閣のいいなりになっている姿です。じつはこれには裏の事情があります。つまり官僚のトップ人事は、内閣に握られてしまっていて、官僚は政権に逆らうことができない、というものです。

この理由は、二〇一四年五月に発足した内閣人事局です。従来官僚主導で行われてきた幹部の人事権を内閣人事局に一元化して行い、官邸主導で約六百名の官僚トップの人事を決定することになったのです。言い替えれば、**政権の意に沿わない官僚を、要職から自由に降ろすこと**

ができるフリーハンドを官邸が握ったということなのです。安倍官邸の方針に従った政策をする人物しか幹部に登用しないというというのです。

実際、インタビューに答えた前文科省事務次官・前川氏は、「我々は志を持って国家公務員になっている。世の中のために仕事がしたいと思ってみんな役所に入ってくる。**全体の奉仕者として公僕として仕事がしたいと思っているが、最近は一部の権力者の下僕になることを強いられる**ことがあるような気がする」と語っています。これがまさに、内閣人事局による官僚の支配を物語っています。

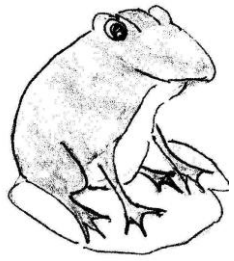
■おわりに

これだけもの安倍政権の腐敗・堕落ぶりが明らかで、そして共謀罪により国民の言論の自由を奪い、さらには国民の人権を大幅に制限して、この国を戦争へ向かわせる方向での憲法改訂を目指すという安倍政権を止め、権力の座から引きずり落とすことがどうしても必要です。

このためには、メディアが大きな役割を果たしていることは確実です。加計学園問題と共謀罪関連の経過の中で、読売・産経・NHKの報道がとくに、安倍政権を支持し、延命に貢献していることは明らかになっています。

読売新聞はとりわけ、五月三日の安倍氏の改憲インタビュー掲載に加えて、前川氏の個人攻撃を記事にするなど、権力を批判するジャーナリズムの使命を放棄して、政権の宣伝紙に堕していると言えます。NHKは国民からの批判されぬように、政府に有利な巧妙な印象操作や、重要な報道を過度に縮小する（取り上げることはするが、見過ごすような伝え方にする）などの姿勢がしばしばみえます。また重要な国会中継を意図的に控える姿勢が見えます。（国会の中継は、ネットの衆参両院のホームページから見ることができますので、これをぜひ利用されることをお勧めします。過去の中継も見られます）また朝日・毎日・東京新聞などは、明確に安倍政権の腐敗ぶりを告発して、ジャーナリズムの本来の役割を果たしつつあるといえます。しかしこれも共謀罪が成立してしまうと、どこまで腐敗した政権批判をすることができるか疑問です。

重要なことは国民の多くが立ち上がり、このように首相の名に値しない人物、日本の国を私物化し腐敗しきった人物に怒りを表し、そしていまや世界標準で「ファシズム」と呼ぶことのできる安倍政権に「ノー」を突きつけ、政権の座から追い落とすことが大切です。



素老人☆よもだ帳（39）

坂本　一光

◆魂は表現されなければ、それが存在するのかどうか、当人にさえもはっきりしない

今日は、素老人中学校長が、生徒会の活動に寄せて話をします。

『読み、書き、話すなどの言葉によって、私たちは他者と交流します。手振り身振り、目と目で分かり合うなど、身体表現で交流することもできます。いずれにしても、自分という人間は、表現されない限り、他者には理解されません。しかし、それどころではありません。自ら表現しない限り、自分の魂の存在自体が自分自身にさえもはっきりしないというのです。なお、魂を表現するとは、心をかたちにすることでしょう。表題は、加藤周一氏がどこかに書いていた（と記憶する）、恐ろしい言葉です。

生活のさまざまな場面で、私たちはたくさんの言葉に出会います。ただ右の耳から左の耳へと流れてゆくだけの言葉もあれば、心に深く刻まれる言葉もあります。そのときどれだけ理解できたかどうかは、ある意味で問題でありません。例えチンプンカンであってもいいのです、自分の心のどこかに引っかかった言葉を、忘れないで、大事にしまっておくことができる。重要なのはそれです。それができる者だけが、魂を表現する能力を高めることができるからです。

生徒会の活動は、生徒の皆さんが、お互いに自由に自己を表現しながら交流を深め、私たちの学習の場である学校を自分たちの力でいいものにしていこうという、自主的で組織的な活動です。皆さんは、こうした活動の中でも、自己表現能力を高めることができます。参考になる、とは言いませんが、私の心に引っかかった言葉のいくつかを紹介します。

◆花も実もある、根も葉もない！

もう三十数年も前のことです。この言葉は、関西のある大学の大学祭を宣伝する大きな立て看板の中にありました。花も実もあるとは、名実ともに備わっていて美しいこと。言わないけれど、根も葉もあるのは当然でしょう。一方、根も葉もないとは、何の根拠もないこと。花も実もないことは言わなくてもわかる。どちらも、植物に例えて言うおもしろさがあります。しかし、もともとまったく正反対の状況下で用いられるべき言葉が、なぜ並んで使われているか。この言葉を見た瞬間、それが私にはわからなかった。皆さんはわかりますか。

遠景に小さく富士山、手前には今にも崩れ落ちるかという一つの大波とそれに翻弄される小船、船上には美しい着物姿の艶かしい女性―北斎の浮世絵風の立看板上部に書かれた毒々しい文字を見ながら、私の第一印象は、「あほか」であった。しかし、どこか引っかかるものがあって、そのまま立ち去れなかった。突然、「ああ。何という風刺精神！」と唸りたくなった

のは、一拍も二拍もおいた後です。この間の長さは私の精神の硬さを表していて、恥ずかしくなりました。花も実もあるとみえるこの暮らしには、もしかして根も葉もないのではないか…。誰もが、ふとそんな気分にならざるを得ない（今思えば、得なかった）時代の不安。この言葉は、現実の諸矛盾を真正面から衝くのでなく、実に小気味よく、笑い飛ばしていたのです。根も葉もないのに浮かれちゃっていいのかな。この表現者に、脱帽！です。（ついでに言えば、この国にバブルの時代があったことなど今ではにわかには信じられないほどです。しかし、経済状況は変わってもアホさ加減は少しも変わらない光景が繰り広げられて来たのは周知のとおりです。根も葉もないのに花も実も付けられる、そんな夢物語はもう終わりにしてもいいのではないか。

愚よ愚よ汝を如何にせん
三本の矢で泡を射る愚よ

三本の矢に次いで新三本の矢も放たれたようですが、その的はみな泡ではないかと私には見えました。それにしても、あのアベノミクスは平成政治記憶遺産にでも追加されお蔵入りしたのでしょうか。今じゃ誰も話題にもしませんね）

◆板垣死すとも自由は死せず

明治一五年、演説中に暴漢に襲われた自由民権の士、板垣退助は血まみれになりながらこう叫んだといいます。

「自由か、さもなければ死か」という二者択一的な言い方があります。本当にそうでしょうか。板垣は、多分、そんなことは言っていません。「国の独立と自由ほど尊いものはない」、ベトナム戦争の最中にこう言ったのは、ベトナム民主共和国の国家主席ホー・チ・ミンでした。この戦争も、ベトナムにとっては独立と自由を勝ち取って生きるための戦争であり、決して、自由か死かという戦争ではなかったと思います。

二者択一的な考えを徹底すると、何でも完全で完璧でなければならないという考えに縛られます。一つしかない真実はいくらでもありますが、例えば、「完全な自由」などというものはどこにもありません。人間にもありません。なぜなら、人間は、必ず死ぬからです。死から自由ではない。あらゆる生は、必ず死と同時に存在し進行するという矛盾や対立をはらんでいます。生と死も、生か死かではなく、互いに関連しつながっている。地上の物質循環を考えれば、生命無き世界の物質も、やがて生命世界に入ってきて生命を支えます。そういう意味では、私たちの肉体は滅んでも、消えて無くなるわけではない。

私たちは、矛盾や対立の真っ只中で、運がいいとか悪いとか、さまざまな偶然にも支配されながら生きています。しかし、起こってしまった偶然には、もちろん起こるべき必然があったのです。ドイツの大哲学者ヘーゲルが（多分）言ったという言葉、「自由とは必然性の認識である」、その深い意味を知りたいと思います。

◆言葉なんかおぼえるんじゃなかった

こんな詩がありました。聞いてください。（詩の表記は原文のまま）

帰途　　田村隆一

言葉なんかおぼえるんじゃなかった
言葉のない世界
意味が意味にならない世界に生きてたら
どんなによかったか

あなたが美しい言葉に復讐されても
そいつは　ぼくとは無関係だ
きみが静かな意味に血を流したところで
そいつも無関係だ

あなたのやさしい眼のなかにある涙
きみの沈黙の舌から落ちてくる痛苦
ぼくたちの世界にもし言葉がなかったら
ぼくはただそれを眺めて立ち去るだろう

あなたの涙に　果実の核ほどの意味があるか
きみの一滴の血に　この世界の夕暮れのふるえるような夕焼けのひびきがあるか

言葉なんかおぼえるんじゃなかった
日本語とほんのすこしの外国語をおぼえたおかげで
ぼくはあなたの涙のなかに立ちどまる
ぼくはきみの血のなかにたったひとりで帰ってくる

言葉なんか覚えるんじゃなかった、究極の殺し文句を呟きながら人は生きているのかもしれない、と思いました』

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

哲学屋のつぶやき（35）
「愛国心」を哲学する

祖蔵　哲

先月号では自国（日本）の過去の歴史を批判的に扱うという「自虐歴史観」を話題にした。その「自虐歴史観」者が「歴史修正主義者としてレッテル貼りしていた「自尊歴史観」がゾンビのごとく蘇っている。やはりこの「主義者」という「レッテル貼り」が根本的、原理的批判を伴わないからこのような状況を招いているのであろう。しかしまた、その批判者自身の「自虐歴史観」というそのものも「レッテル貼り」なのなのであるが。こういった「レッテル」同士の議論は不毛になる。その「自尊史観」者が攻撃するのが「自虐史観」だ。つまり「自国をなぜ貶めるのか」「自分の国が愛せないのか」「嫌いなら出ていけ」という「感情論」である。

しかし、よく考えてみると「自虐史観」者が「自分の国を愛していない」とは言っていない。「自国」とは何を指すのかがはっきりしていないが、「自尊史観」者は自分達が勝手に作り上げた「国」を「自分の国」の基準にして、さらに極端な二分法でもって選別する。つまり、人を「味方か敵」に分類し物事を「善か悪」かに分けるもので「中間」はない。味方は善であり、敵は悪である。そして「少しの悪」も悪でありそれは「敵」である。「敵」の敵は「味方」になり「味方」を拡大していけるという「多数＝力」という発想

である。そもそもこの「多数＝力」という思想は「民主主義」の原理である。しかし、この「数による民主主義」が危ういというのは過去の歴史が幾度も経験しているはずである。民主主義発祥のギリシャの「ポリス政治」はこの「数の民主主義」によって専制政治を許し、腐敗した後、マケドニアに侵略され国が滅亡した。近いところではナチスドイツが誕生したのもこの「数の民主主義」である。問題なのは「レッテル貼り」のレッテルが二つしかないことである。人間も物も進化すれがするほど「多様」になり複雑になる。大きな「類」が小さな「類」に分かれていく。これが進化である。これは自然の「変化」に対する自己保存の方法であろう。このように、そもそも「進化」とは「善悪」のような価値判断を伴うようなものではなく「変化」に対する「対応」関係である。

さて、「愛国心」に話を戻そう。「生まれた国を愛しましょう」という一見「自明」のことを殊更言わなければならない状況とはいかなる時なのでしょうか。「生んでくれた両親を愛しましょう」「生まれた家庭を愛しましょう」「生まれた故郷を愛しましょう」このような自明なことに、改めて言葉が必要なときはそのような状況が失われているときである。なぜそのような状況になったのか、それは個人性が強まる程、「対象」に対する「価値観」が多様になるからである。そして「両親」から「国家」までがその対象になっている。このような状態、すなわち多様な「個人」や「家族」の「価値観」が垂直に「国家」で同じ「価値観」ではつながらない。これを同じ価値観で「無理に」「理屈抜きに」つなげようとするのが「愛国心」である。「愛国心」は決して国の外側には向かない「他国を愛しましょう」「他国の人を愛しましょう」「世界を愛しましょう」「人類を愛しましょう」とはならない。つまり「国家」という内部の構成対象を愛することである。そうすると「国家」とは何かという厄介な問題が出てくる。日本でもつい最近まで自分は「日本国の人間」であるとの自覚はなかったであろう。生まれた「村」から出たこともない人々に外の人々の世界は想像すらできないし、外から自分たちを見てみるという客観的視点はおそらくなかったであろう。以前にも話したが、本来はこの「近代国家」というものは抽象的で恣意的なものであり、全世界という視点から区分するため、目に見える形にするために「国境」や「国権」というものを定義しているし、その状態を保つために「法」が必要になる。しかし、今や「個人」である「私」が生まれた時にはすでに「国家」があった、「私」は「国家」を一度も「承認」していないし、「契約」もしていないが。ただ「追認」しているだけである。「愛する」「愛さない」は本来「承認」か「契約」があってのことであるはずである。つまり相互扶助関係である。一方的な服従関係の「契約」を「承認」するわけにはいかないし、ましてや「愛する」ことはできないはずである。「愛せよ」と言い続けなければ存続しない、これが「近代国家」である。その意味で言えば「愛する」対象でなくなった「国家」は出ていけばよいとの理屈も成立する。その自由も「近代人」が獲得したものである。現に世界で発生している「難民」は「自国」を捨てている、捨てざるを得ない。

しかし、近代国家以前の「共同体」社会はそうではなかった。自分が生まれた「共同体」を出ることは「死」を意味しており「自由」はない。「村八分」はまだ救われている。残りの二分、すなわち「火事」と「葬式」だけは助けてもらえる。どちらもほっておくと共同体に「類焼」や「怨霊」という被害が及ぶからである。すべてが「運命」であり「共同体」という「意志」が「生命」であり「愛するしかない対象」であった。「共同体」とは理屈抜きに「母なる」「優しい」「懐かし」感情的な存在でなければならない。このように本来的に「理屈」である「近代国家」を支えるのがこの「愛する」という「感情」である。本来「理屈」である「国家」を「理屈抜き」で「愛せよ」ということに「愛国主義」のかかえる「自己矛盾」がある。さらに「理屈」は「理性」であり「感情」は「感性」である。しかし、この「理性」と「感性」はいつの時も対立関係にある。「感情的になるな、もっと理性的に話そうよ」とかというのが典型的な事例である。「人間は理性的な動物である」と言われもする。

ジャーナリストにして小説『１９８４年』や『動物農場』を書いたジョージ・オーエルは「愛国心」について次のように述べている。『自分では世界中でいちばんよいものだと信じるが他の人びとにまで押しつけようとは思わない、特定の場所と特定の生活様式に対する献身』と。つまり、郷土自慢はいっこうにかまわないが他人に強制はできないのである。この他人に強制させ拡大する方向へむかうのが「ナショナリズム」である。被支配的被抑圧的状態の開放を目指す「民族主義」や「国民主義」は歴史的に「良いナショナリズム」と呼ばれたりもするが、一般に「ナショナリズム」とは「国家」が「個人」を優先するような「国家主義」「国粋主義」を言う。

さて、「愛国心」であるがその対象の国が現在は必ずしも自分の生まれた国には限らなくなってきている。移民国家や難民、亡命として否応なく帰属せざるを得ないような国も愛せざるを得ない。別に「母なる」でも「懐かしく」でもなんでもない。ここに近年の「愛国心」の排他主義が生まれる。「この国」を「愛せない」なら「出ていけ」である。この場合の「この国」というのは自分たちの価値観を基準にした国のことである。そしてその正統性を求めるために「より古く」「より権威的」「より多数」という「価値観」を立てる。「より古く」は「歴史」へ「より権威的」は「宗教」へ、「より多数」は「権力」へ繋がる。これらの「歴史」や「宗教」「権力」を認めないものは排除されるのである。ところでこれらの三つのものも「作られたもの」であり「理性的」な

ものである。

「愛国心」のこの「作られた」物語の「排他性」「排外性」は増大し続けている。「排他」「排外」というのは「分配」をめぐるときの「争い」である。何を分けあるのか、それは「富」である。資源や食料を分けあう、それは「生存」のためである。近代以後、分け合う「富」は「無限」にあると考えられていた。しかしその「富」は「有限」であると判明したのだ。そしてその限られた「富」の分配をめぐっての争いが開始された。そこに「我先に」という「排外主義」が生まれる。「如何に共に生きるか」という「存在論」よりも「誰が生きるに値するか」という「道徳論」になっている。

「教育勅語」や「軍人勅語」の「国家道徳」を復活させ、「仮想敵国」や「オリンピック」で作られた「愛国心」を煽る「自国ファースト国家」に人類の未来はあるのかを問わねばならない。

大峯奥駆道（10）

梵店主

愛宕山から大峯奥駆道へ一気に飛躍したよっちゃんは、いったいどんな山なのか調べ始めた。これまで一度も興味を持たなかったので全く知らなったのだ。

調べ出すと、ふと思い出した。「そうだ、八経ケ岳は登ったことがある」あれは、いつだったか忘れたが雨が降る梅雨時の日に確かに登った。奈良の吉野に住む山の友人が案内してくれて山仲間たちと登った。

トンネルの手前から急な山道を登りオオヤマレンゲが咲く群生地の防護柵を通って八経ケ岳の頂上の仏像を見た。えらくバテ汗だくで登ったから余裕がなく記憶も褪せてしまっていたから忘れていたのだ。

その翌年にも玉置山神社にも連れて行ってもらった。そうだ、その晩十津川温泉で宴会をしたのだ。

少しずつ、よっちゃんは、記憶を呼び戻してきた。まったく知らないとこではない。一部だが歩いているんだ、と少し安心した。

しかし、調べていくとなかなか大変なコースであると分かってきた。何が大変かというと、まず距離がながく水場も少なく、営業している山小屋も少ない。アプローチも大変である。

さっそく山友達に聞いてみたが、誰も縦走をしていない。部分的には登っているが、通しで奈良の吉野山から熊野三山を経て熊野本宮大社まで縦走をした知り合いはいなかった。

このルートは、普通であれば一週間の行程らしい。一週間という日数は仕事をしておればなかなか休めない。二〇〇〇メートル近い尾根道だからテントで寝泊まりしなければいけない。大峰の宿坊や弥山の山小屋は夏季には営業しているが、他は避難小屋であるから、あまりあてには出来ない。

およそ、山歩きの基本は、荷物を担いで八時間は歩ける体力があるということだ。技術的な事はさて置きまず体力である。一週間のテント泊なら最低でも二十五キロぐらいの荷物になる。これを担いで切り立った岩峰を上り下りするのは並大抵ではない。

しかし、調子者であるよっちゃんは、すぐに昔の栄光に酔ってしまった。学生時代に担いでいた荷物を思い出したのである。山岳部の山行では六〇キロぐらいはあたりまであったからだ。ひどい時などは八〇キロを超えた時もある。一度腰を下ろしたら立ち上がれないほどの重さである。それでも険しい山々を歩き通してきたのだから何とかなると舞い上がったのである。

今のよっちゃんは、せいぜい一〇キログらいが関の山だ。空身でも危なっかしいぐらいだからとても二十五キロなんて担げやしないのだが、それがわからない。

山登りは、しょせん体力勝負だ。バテると事故のもとになる、道に迷ったり滑って滑落したりする。体力があれば冷静に判断し落ち着いて行動できるが、バテだすとそれが出来なくなる。

だいたい疲労凍死にしても動き回り疲れ果て体力の限界まで消耗するから死ぬのであって、動かずじっとしておれば、そう簡単に人は死なない。飲まず食わずでも三日ぐらいは生きられる。水だけを飲んでいても三〇日ぐらいは生きられるのだから、困った時には動かない。じっとしてチャンスを待つに限る。

そういっても、人は待てないのだ。じっとしていられないのである。動きたがるものだ。

よっちゃんは、病み上がりでとてもじゃないけど、大峰奥駆道を縦走できる体力もないのに行く気だけは出てきたから大変だ。何が大変かと言えば、まわりの友達がえらい迷惑をするのである。

よっちゃんは、いつもの癖で何かをする時には、すぐに後輩を使う悪い癖が出るのである。大峰奥駆を教えてくれた大江君にさっそく同行をお願いしようと考えた。彼は山岳部の後輩だから体力も山の知識もある。彼なら文句はない。

山岳部の後輩は一生先輩には頭が上がらない。山のことだけではない、何かと先輩は後輩を使うのだ。よっちゃんも先輩に使われてきたのだが、よっちゃんは、先輩に使われる以上に後輩を使ってきたと思う。たまに飲み食いをおごってやるだけで、何かと頼みごとをしてきた。後輩もたまらんだろうと思うがやめられない。果たして大江君はよっちゃんの頼みを聞いてくれるだろうか。

連載「おっちょこチョイぼけ」（50）

――昭和女、どっこい日記――

身のまわりのコワイ出来事…の巻

先日の夜、梅田駅から地下鉄（御堂筋線）に乗ったときのことだ。電車は朝のラッシュ時ほどではないが、そこそこ混んでいて、立っているお客さんも多かった。私もつり革を握って立っていたのだが、目の前の座席に座っている女性がなんかゴソゴソしているので、気になって見るともなく見ていた。

その女の人は、三〇代後半か四〇そこそこ。色が白くて、ちょっとアカぬけた、目鼻立ちのキレイな人だった。

ところが、この人、ゴソゴソしているのは、隣に座っている若い女性を自分のテリトリーから追い出そうとして肩をくねらせたり、お尻を動かしたり。電車の座席で、テリトリーもヘチマもないが、この人にとっての「自分の領域」にお隣さんの肩や腕があるのが我慢ならないらしくて、とうとうヒステリックな声をあげた。

「ちょっと！、触らないで下さい！」

一瞬、周囲の人がシーンとなるぐらいの声。上から見ていると、そのキレイな（姿かたちは。でも、この怒気をはらんだ言い方でもうキレイとは思えなくなった）女の人は座席の端に座っていたので、お隣さんがいない方に自分のカバンを置いていて、その分、余分にスペースを取っているのだ。

攻撃を受けている若い女性は、スマホをいじるのに夢中で（もしくは夢中なふりをしていて）、我、関せずといった様子。ほんの気持ちだけでも体を反対側にずらしてあげたら、この女の人の気持ちもおさまったと思うが、デンとしてテコでも動かない。なかなかの剛の者と見受けられた。

キレたおねえさんは、反対側に置いていたバッグを膝にのせると（これによって、おねえさんのテリトリーが若干広がったにも関わらず）、お隣さんへの攻撃を本格化。左半身で、お隣さんをグイグイと押し始めた。お隣さんは、「えっ」という顔をしながらも踏みとどまっていたが、さすがに体が動いて、お隣さんのお隣さん（若い男の人）の腕や肩に当たって、彼は「な、なんだよ！」と不快感丸出しでにらんだ。お隣さんは、「こちらの人が押してくるんです」と声に出さずにアゴで伝え、お隣さんのお隣さんもアゴで「ああ」と了解。ま、「触らないでって言ってるじゃないですか！」と、キレたおねえさんが何度か恫喝していた声が聞こえていたはずなので、わかっていたと思うが、彼もまたスマホに夢中で、耳にはイヤホンを付けていた。二人は見知らぬ者同士ながら「イヤな女やな～」（推定）と目と目で会話。

執拗に押してくる女の人に向かって、「オバハン、押してくるなや！」とケンカを売るタイプの男性ではなかったのが、私としては残念だったが、彼はキレた女の人の方に少しだけ乗り出すようにして、抗議のまなざしを向け、「わかってる、悪いのはアイツや」とお隣さんにうなづいて見せたりしていた。

そんな無言の抵抗など意にも介さず、問題の女の人はお隣さんをにらみつけ、「もおっ、いいかげんにして下さい」とか言い始めた。「いいかげんにしないとアカンのはアンタやで！」と上から（立っていたので）見ていた私は言いたかったが、こう見えて、私は小心者なのだ。気は強い方だし、若いころ道端で数人のヤクザにからまれ、「警察に行って話、しましょ、警察！」とがなり立てて、ヤクザの兄貴分に「あんた、気ぃ強いな」と褒められた（呆れられた、というべきか）思い出があるが、それはよほどブチ切れたときだけに発動する非常時専用回路で、そのときでも（真っ昼間、通行人もいっぱいおる、相手は複数で、こっちは身重の姉と私だけ。まさかここで刺されることはない）という意外に冷静な状況判断もしていた覚えがある。あれが夜道で、ヤクザ・一、私・一だったら、私はからまれた瞬間に命がけ全速力で逃げる。ヤクザ・三（四でも五でも一緒だ）、私・一だったら、からまれる位置に身をおかない。からまれる前に逃げる。常識である。

そんな小心者の私なので、キレた女の人に「何、見てんですかっ」と怒られないように、ときどき車内吊り広告を見ているふりなんかしながら、観戦し続けた。

飽きることなくグイグイぐりぐり押しているのは一方だけで、一方はデンとして動かず、スマホの画面を見続けている。味方についたかに見えた男の子もスマホの画面に戻り、無視を決め込んでいる。もし、押されている女の子が押し返すか、「やめて！」とか言えば、対決は終わったのかもしれないが、そうしないから、女の人はキレまくっている感じだった。

とうとう、その女の人が立ち上がった。ここで降りるらしい、とほっとした瞬間、お隣さんに向かって吐き捨てるように言った。「デブ！」。最後っ屁というアレだ。

さすがに、そのときはお隣さんもスマホから目を離し、びっくりした表情で見返していたが、「ババア！」と言い返したりしなかった（残念！）。

ああいうキレイ系の女の人は「ババア」とか言われると、私たち一般人より傷つく（と思う。だって、美貌が売りなのだから。「ブス！」と言われたら、「アンタの方がよっぽどブス！」と言い返せるが、明らかに年の若い子に「ババア！」とは言い返せないし。）

私はできることなら、「ちょっと待ち！アンタ、私は上から見てたけど、アンタと隣の女の子の座席の幅、まったく同じぐらいやったで。そりゃ、若い子の方が、ちょっとがっちりタイプの体型やったし、スマホいじって無視する態度もどうかと

思うけど、アンタのそのキレ方、本当に見苦しかった。全部、動画で撮ったから、ＳＮＳか何かしらんけど、流しといたる！」。もちろん、動画以降は嘘っぱちである。そもそも、その女の人にひとこと言うということ自体、私の妄想であるが。

そして、微動だにしなかった豪傑女子にも、「アンタもアンタや。最初に、少し譲ってあげるという態度を示していたら、この人がこんなに切れることはなかったはずや。お互い、ちょっと譲り合うというマナーも知らんと、デ～ンとふてぶてしく生きていくという態度、若いうちに改めた方がええで！」と言って聞かせてやりたかった。

もちろん、脳内説教である。

小心者で、頭も悪いので、こういうときに場の空気をなごませるすべを思いつかない。大阪のおばはんとして見て見ぬふりは情けない。「なに、押しくらまんじゅうしてんのんな（アハハハ）。アンタら座ってるから、もめるねんやん。おばちゃんにその席、代わって（ケラケラ）」ぐらいは言えるおばはんに私はなりたい。でも、正直に言うと、この電車で座れなくてよかった。立っててよかった…。

（ＡＯ）

大人の今昔物語（34）

石川　吾郎

今回は、囲碁の名人が出会った神秘的な囲碁の精の話しです。教科書に出ない度は、一／五。

碁打ちの寛蓮、碁打ちの女に会うこと（巻二四ノ六）

今は昔、第六十代醍醐帝の延喜の御代、囲碁の名人・寛蓮という僧がいた。寛蓮は出自も賤しからず、宇多院の殿上法師であったので、醍醐皇の宮中にも出仕し、天皇の囲碁の相手を勤めていた。天皇は先手二目置いて対局されておられた。日頃対局されるほどに、黄金の枕を賭け物として勝負され、天皇が負けられると、寛蓮はその枕を賜って退出する。と、若い殿上人の血気盛んな者をやって、奪い取らせていた。このように賭け物を奪い取られることが度々になった。

そうこうするうちに、例のごとく天皇が負けられて、寛蓮がくだんの枕を賜って退出しようとすると、例のごとく若い殿上人が数人追ってきて枕を奪い取ろうとする。寛蓮、懐ろからその枕を引き出して、后町（きさきまち）の井戸に投げ入れた。これを見た殿上人たちは、あきらめて皆去っていった。寛蓮は小躍りして退出をした。その後、天皇はその井戸に人を降ろして枕を取りあげてみれば、木の上に金箔を貼った偽物だった。天皇は寛蓮が本物の枕を持ち帰ったのだと気づいたのだった。寛蓮はその後、この黄金の枕をもとに、仁和寺の東あたりに弥勒寺という寺を造営したのだった。天皇もこれを知って「上手く企んだものだ」と笑っておられた。

こうして常々参内し、また宮廷から退出するにあたって、寛蓮は一条大路から仁和寺に帰る途中、西の大宮通りをいくほどに、あこめに袴姿（普段着）のこざっぱりした出で立ちの少女が、寛蓮のお付きの童子を一人呼んで何か話そうとする。何か、と振り向くと、童子、車の後ろに来て言うに「そこの童女が申しますには、ほんの少しの間、この近くの所に立ち寄っていただけますまいか。申し上げたいことがあります、とおっしゃる方がございます」と。

寛蓮、これを聞き「一体何者なのだろう」といぶかしく思ったが、この童女の言うに従って、車をやらせていくと、土御門大路と道祖（さえ）大路の辻あたりに、檜垣を巡ら押立門（おしたてもん）の家がある。

童女「ここです」と言うので、寛蓮はそこで降りて入ってみる。みると前には放出(はなちいで)の広縁があり、板葺きの低い屋敷だが、前の庭に簾（まがき）をしつらえ、植え込みにはしかるべき草などを植えて、風雅な風情で住みなしている。寛蓮は放出に上がってみると白い伊予簾（いよすだれ）を掛けている。秋のころなので、夏の几帳をさっぱりとした感じに簾に重ねて立てている。簾のもとに手入れの行き届いた碁盤が置かれてある。碁石入れは風情ある感じに碁盤の上に置いている。その傍らに円座が一つ置いてある。

寛蓮、円座から離れて座っていると、簾の内から奥ゆかしく魅力的な女の声がする。その声が言うには「ただ今、世間に並びない碁打ちとお聞きしましたので、どのようにお打ちになるのかと、ぜひ拝見いたしたいと思いまして。私の亡父が私どものことを少しは碁の才のある者と思ってくれていましたので、「習いなさい」と教えてくれて、亡くなりました。その後は碁を打つこともありませず過ごしてきましたが、あなたさまがこのようにお通りになるとお聞きしましたので、恐縮ですがお止めいたしました次第」。寛蓮はにこやかに「とても興味があります。それにしてもどのくらいお強いのでしょうか。何目ばかりお置きになりますか」といいながら、碁盤ににじり寄る。その間に空薫（そらだき）された香が芳ばしく漂ってくる。女房たちは簾から顔をのぞき合う。

寛蓮、碁石入れを一つ取り、もう一つを簾の内に差し入れると、女房の曰く「お待ち下さい。そのままに置いて下さいませ。どうしてお恥ずかしくも打てましょう。」寛蓮これを聞き「奇妙なことをいうものだ」と思いながら、碁石入れを二つとも自分の前に置いて「女の言うことを聞こう」と思った。碁石入れの蓋を開け、石を握り、音をさせながら待っていた。寛蓮は風流人で、宇多院からも一目おかれているような存在なので、このなりゆきを余裕をもって面白く感じていた。

すると几帳の隙間から、細く木を削った白い二尺ばかりの棒を差し出して、「私の石はまず、ここに置いて下さいませ」

と、盤の中央の、天元の位置を指す。

「本来ならば何目か置かせていただくはずですが、私の実力がどれほどで、何目置いたらよいのやら分かりませぬので、今回はまず（平手で）先手を打たせて頂き、その実力が分かりましたところで十目も二十目も置かせていただきましょう」というので、寛蓮は天元に石を置く。次ぎに寛蓮が打つ。女の打つ順になるとその棒でもって場所を指定する。このように打ち進んでいくと、寛蓮の石は皆殺しに打たれてしまった。僅かに生き残った石は駄目を押していくうちに、手数は多くないのに、大半の石が囲まれて手のほどこしようがない。寛蓮が思うに「これは大変な打ち手だ。相手は人ではなく、妖怪変化に違いない。人ならば、自分に対してこのように打てる碁打ちはいないはず。相手がどれほどの名手としても、こんなに皆殺しに打たれるはずはない」と、恐怖に襲われ、盤面を崩してしまった。

ものも言えずに茫然としていると、女は少し笑うような声になり、「もう一局いかが」と言う。寛蓮は「こんな者には、物も言わないのいい！」と、尻切れ草履もろくに履かず、車に逃げてそのまま仁和寺に帰った。そして院に参内して、宇多院に報告した。院も「いったいこの正体は誰なのだろう」と訝しがられ、次の日に例の場所に人を遣わして尋ねさせたが、その家には人は誰もいない。ただ留守に、今にも死にそうな様子の尼僧が一人いた。それに「昨日ここにおられた方はどなたですか」と問えば、尼僧「この家には五六日東の京（左京）から方違えのために来られておられましたが、夜前にお帰りになられました」と。院の遣い「その方違えに来られた方はどなたで、どちらにお住まいの方ですか」と尋ねる。尼僧「私がどうして存知あげましょうぞ。まったく存知あげません」と。

院の遣いはその後もいろいろ聞きだそうとしたが無駄であった。醍醐天皇にあってもこのことをお聞きになりたいそう不思議がらせられた。

世間の人々は「人だったら、寛蓮と対局して、皆殺しにするような碁の打ち方ができるものではない。これは妖怪変化が来たのだ」と、疑った。当時はこの噂で世間が持ちきりになったものだと、伝えられているという。

《コメント》

囲碁にまつわる説話です。醍醐帝の囲碁に対する熱意のほどがわかる話しです。醍醐帝は、第六十代天皇（在位は八九七年から九三〇年）。自身がリーダーシップを取って政治・文化の振興に努め、その治世は後世に「延喜の治」として理想の時代とされたといいます。他方で菅原道真を太宰府へ追放にして、菅原道真を陥れた罪、父である宇多天皇に背いた罪などとして、地獄へ落とされ臣下共々罰をうけているという話しも伝わっているそうです。

B級サラリーマン渡世譚（47）

明石　幸次郎

明石が深呼吸してから、宴会場に入って行くと、幹事のN川が立ち上がり、近寄ってきて、席に案内してくれた。席に着くと直ぐに、横にいたM居が「おう、ご苦労さんやったなぁ。話し合いは上手くいったか？」と難しい顔して聞かれた。N川がそれを遮り「M居さん、報告は後で、いいじゃないですか？明石さん、先ずは、乾杯しましょう」と言いながら、ビールを注いでくれた。

その後、手を叩きながら「それでは皆さん、宴もたけなわですが、本日の歓迎会の主賓の一人である、堺工場から異動で来られた、明石さんが、宇都宮工場から帰って来ました。歓迎の意を込めて、乾杯をしたいと思いますので、K田部長、改めて乾杯のご発声をお願いします！」と発言した。

ざわついていた雰囲気が一瞬、静かになった。K田部長は、自席で立ちあがり「明石さん、今日はご苦労さんでした。まあ、工場との打ち合わせが、上手くいったという事だと思います。まずは、歓迎の意を表して乾杯といきましょう！」とコップを眼の位置の高さまで上げ、それからコップのビールを空にして、「最初にも、言いましたが、我々の輸出第二部は、個性派集団であり、上からの指示待ち人間は要らない。担当国を持ったからには、どうやったら、その国の売り上げを伸ばしていけるのか、又、競争他社の追随を許さないかを、担当者自らが市場の絵を描かいて、上司を含めた関係者を巻き込んで、主体的に動いてやって欲しい。幸い、この度は、工場から転勤で来られた三名の精鋭は、工場の実務経験を積み、メーカーマインドをも持ち合わせており、これから三名の大いなる活躍を期待しています。その一人の明石さんは、転勤二日目にして、早速、引き継ぎを兼ねて、M商事、宇都宮工場と打ち合わせをして、成果を上げて帰って来られたと思っています。以上、終わり！さあ、多いに飲もう！」と、笑いながら、明石の方に視線を向けて挨拶を終えた。

その後、N川が「それでは続けて、成果を上げて？帰って来られた、明石さんにご挨拶をお願いします」と笑いながら、明石に合図を送った。

明石は、準備していた挨拶の内容を咄嗟に思い出しながら、立ち上がり「堺工場から、この度の異動で来ました、明石と申します。堺では、資材課にいましたが、その時に、ここにおられる何人かの方とは、お目に掛かりました。この度は、縁あって、皆さんの仲間に入れて頂くことになりました。

えっと、今日、納期の打ち合わせに、宇都宮工場に行って来ました。工場長に挨拶した時に、言われましたことは、宇都宮工場は現在、ほとんど国内中心の生

産、出荷であるので、今から海外に種を蒔いておかないと、国内だけでは刈り取るものが減って、大変なことになると思う。輸出拡大の為なら、工場は何でも協力するので、宜しく頼むと言う様な事を言われました。私の役割は、海外の新しい市場に種を蒔き、その種が実をつけ、刈り取るまでは、時間が掛るかも知れませんが、輸出拡大の実行に微力ながら取り組んで行きたいと思います。皆さんのご指導を宜しくお願いします。」と、事前に考えていた内容でない、通り一遍の挨拶を終えようとしたら、端の方から「おーい。明石、お前、優等生的な挨拶は、もうエエとして、それで、今日は成果を上げて来たんか？」と野次が入った。途端に、どっと笑い声が上がった。

明石は、一瞬ためらったが、怯まずに「はい。堺工場で揉まれた泥臭いやり方で、正直に客先の要望を伝えて、協力を求めました。工場関係者は何とかせなあかんなぁと思ったのか、こちらの希望納期を受けてくれました。これが、成果です。まあ、M居さんが、既に、工場の工務課長に根回しをして頂いていたことが大きかったと思いますが、工場の人が、初めて会った私に自分たちと同じ様な匂いを感じ、協力してくれたのではないか、と思っています」と答えたら、幹事のN川は、にっこりとして「それは、良かったですね。纏まらなかったら、明石さんも、この席には居なく、宇都宮に止まっておられたと思いますが、ハッハッハッハーー。まあ、明石さんが、どんな匂いなのか？後で嗅がさせて頂きます。それでは、引き続き飲みましょう！」という事で、明石は、やっと解放されてその場に座ることが出来た。

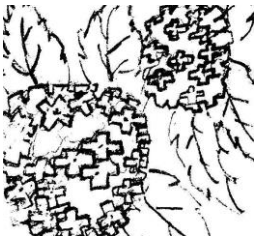
横に座っていたM居は、今度は笑顔で「明石、ご苦労さんやったなぁ。船積には間に合うのやなぁ。まあ、飲めよ」とビールを注いでくれた。コップの半分くらい飲んでから「大丈夫と思います。M居さんのお蔭です。又、宇都宮に出向いて、状況と進捗確認はしておきます。今日行って分かった事は、今回のキーマンは資材課の同期のM本と言うヤツです。次回、宇都宮に行ったら、夜一杯やって、仲良くしておきます」「あーそうか？頼むわなぁ。俺も、心配で心配でなぁ」と、どっしりと構えている様に見えるが、意外と小心であるのでは、と明石はM居の態度と言い方で感じた。

向えに座っていたT村が「明石くん、アンタ、二日目にしては、ようやるななぁ～まあ、一杯いこう。グッと空けて、空けて！俺らも工場との納期の話し合いは苦労しているんやで。来春に、中国向けの出荷があるけど、これは、大変やで！まあ、今度はその予行演習になったなぁ。良かった、良かった」と笑うと八重歯が見える顔を向けて、本当に喜んで、コップにビールを注いでくれた。

そこに、A杉課長がビール瓶を手に持って「明石、おい、飲め！」と言いながら、少し離れていた席から歩いてきた。そして明石のコップにビールを注ぎながら、横に座っているM居に「M居、K田さんと話していたんやが、今度、俺が、バングラに行くので、韓国は、明石に出張させようと思うが、エエか？工場に要求だけはして、韓国側との最終契約は、まだと言うのは、輸出部として恰好がつかんからなぁ。早く行かせて、契約を纏めさせようと思っいるが」とチーム長であるM居の了解を求めた。

M居は「ちょっと、出張は早いと思いますが、M商事のI田さんも同行するのであれば、エエのと違いますか？」と答えた。

明石は、それを横で聞いて、M居の言い方に何かすっきりしないものを感じて、コップに残っていたビールを一気に飲み干した。宴会場に慌てて、駆けつけ、挨拶も何とか終え、その上、空腹でビールを何杯も飲まされたこともあり、どっと疲れを感じて来た。



オクラの山たより（9）

困了生

今回から清少納言と「枕草子」について何回か書いてみることにする。とはいえ日本古典文学の専門家ではない素人の悲しさ。あれこれと読み散らした際につけたノートを頼りに書いていくだけのこと。読者諸氏が「へーッ」と思われることがあれば、幸い。赤っ恥をかいて尻をからげて途中で逃げ出すのがオチかもしれぬが、「知らぬ顔の半兵衛」を決めこみ厚顔無恥を心の支えとして書き進めていくこととする。

さて、前口上はこれくらいにして、実は以前「いずれ紹介する」と書いてそのままになっている宿題があった。「オクラの山たより　五」で紹介した清少納言の兄である清原致信殺害事件を紹介したくだりで、事件現場にたまたま居合わせた清少納言がとんでもないこと行動に出たと書いた、その部分である。

後一条天皇の行幸の日、大和国に勢力を伸ばしていた源頼親の配下によって大和守藤原保昌の郎等であった清原致信が殺された事件についてはすでに述べた。「殺人の上手」といわれた源頼親に命じられた武士たち二〇人ほどに襲われた致信は身に何本かの矢を受けてあえなく倒れ臥したであろうが、その時、居合わせた清少納言の行動を「古事談」第二の五七で次のように書いている。

清少納言同宿にてありながら、法師

に似たるによりて殺さむと思ふ間、尼たる由、云ひえんとて忽ちに開を出だすと云々

文中の「開」とは「つび」と読み女性の性器のことである。致信が襲われたとき同宿していた尼姿の清少納言は男の僧侶と賊に思われ、あわや殺されそうになった。そのとき清少納言は法衣の前をたくしあげて「私は女よ。ほら、これが見えないの」と ばかりに「女性だ」ということを示して難を逃れたというのである。「古事談」は鎌倉時代初期に村上源氏出身の源顕兼が編集した説話集であり、平安時代の天皇・貴族・僧の世界の珍談・秘話を多く集めた作品。要するに貴族の間でささやかれた噂話を中心にした説話物であり、この清少納言の行動も事実だとにわかに信ずるわけにはいかない。

「古事談」にはもう一カ所だけ清少納言が登場する。「古事談」第二の二五である。

清少納言、零落の後、若き殿上人（てんじょうびと）あまた同車して彼の宅の前を渡る間、宅の体、破壊したるを見て『少納言は無下にこそなりにけれ』と車中に云ふを聞きて、もとより桟敷に立ちたりけるが、簾をかきあげて、鬼形之女法師の如き顔を指し出でていはく『駿馬の骨を買はずやありし』と。

落魄した清少納言の話である。晩年の清少納言は、尼となって、廃屋のような庵でひとり寂しく暮らしていた。そこに通りかかった上流貴族の若者たちが、「清少納言も落ちぶれたものだ」と噂していると、彼らが来る前から桟敷に立っていた清少納言がそれを聞きつけ鬼のような形相で簾を上げ、「駿馬の骨を買わずにいくのかい？」とどなったという。「駿馬の骨」とは中国の史書「戦国策」にある話。駿馬を求めよという王の命を受けた賢者が、名馬の骨を大金で贖（あがな）うと、より高額での買い上げを望んで天下の駿馬が王のもとに集まったという故事である。「老骨といえども若いだけが取り柄の駄馬よりは利用価値もあろう。今の世に駿馬の骨を使いこなせるだけの賢人がいないだけなのさ。」と若者たちに一喝をしたということであろう。それにしても老女とはいえ「鬼形之女法師の如き顔」はひどい。確かに機転をきかして女性であることをさっと示して難を避けたこと、「駿馬の骨」と漢文の知識を駆使して若者の嘲りに対して見事に切り返したことはどちらも彼女の思い切りの良さと頭の回転の速さを賞讃したものといえなくはない。しかし、どこか冷笑というか、蔑みというか、「生意気な才女の末路はこんなもの」と笑いものにしている感じは否定できない。

右に紹介した説話は鎌倉初期のものであるが、これが江戸時代となると一段とひどくなる。晩年に零落し全国を漂泊し四国の地で亡くなったという伝説があるだけに清少納言の墓は全国に九カ所ある。筆者の住む近所では京都市中京区新京極にある誓願寺にかつて清少納言の墓があった。「あった」というのは江戸時代の地誌に「墓あり」とあるのだが、明治初年に新京極開設にあたって寺域が狭くなり現在はない。「続群書類従」巻七八三にある「洛陽誓願寺縁起」という文章には、清少納言自身が読んだら間違いなく絶句しそうな内容が書いてある。「鬼形之女法師」がここまでくるか、といった興味から一読していただきたい。なお、元の文に句読点がないため、句点のみをつけておく。

清原の元輔の娘、清少納言は一条院皇后の侍女たり。好色を本（もと）として露命のあへなき事をおもわず。愛欲を心として将来の恐れある事を知らず。只たのしみを春の花にたわむれ。おもひを秋の月によせ。花鳥の遊宴にのみ心をつくし。栄を朝恩にきわめて仏道修行のこころざしつゆばかりもなき人なりしが。あるとき事の縁にひかれて当寺に詣で如来を拝したてまつり。悲喜交流し。ふしぎに菩提心を発し。終に如来前にて緑の髪をおろし比丘尼となり。……常修念仏の行者となれり。……終にこの寺にて往生の素懐をとげ侍る。

要するに誓願寺の如来の霊験あらたかなことを述べた文章だが、「好色を本として」とか「愛欲を心として」とはいったい誰のことだ、と言いたくなる。余計なことながら、筆者の知る限り清紫と並び称された紫式部にはこうした話はない。また紫式部の墓も京都市内、某電子部品メーカーの敷地内に一カ所あるだけであり、それは小野篁の墓の隣にある。

以上、清少納言の晩年の落魄話を書いてきたが、他にも清少納言にまつわる悪評はいくつかある。有名なのは「清少納言は肥満体かつ不美人だ」という説。この「肥満体かつ不美人説」のうち「肥満体説」の根拠らしきものは「枕草子」にある。それは「枕草子」一五八段の「うらやましげなるもの」である。その段で清少納言は内裏を出発して伏見の稲荷神社詣でをしたときの時の様子を書いている。時期は二月（旧暦である。現在の三月中旬にあたる）の初午の日。内裏からおよそ一〇キロを歩き、麓の伏見稲荷大社から稲荷山の頂上にある上社まで行こうとすれば二三〇メートルの山を登らねばならない。これには清少納言もさすがに音をあげたらしい。

「（午前十時頃に中の御社に到着した）やうやう暑くさへなりて、まことにわびしう（やりきれなく）、かからでよき日もあらむものを（こんな暑い日ではなく、ちょうどよい日もあるのに）、なにしに詣でつらむとまで（なんだってこうして参詣したのだろうとまで）、涙落ちて休むに」三〇歳ぐらいの女が着物の裾をたくし上げて元気よく「麓と山頂を七度往復するつもりだけど、楽なものよ。」と言って歩いて行く姿を見かける。思わず清少納言の思ったこと。身分の低い女だけど

かれが身にだいまならばや（身軽な彼女の身に今だけは替わって欲しい）、とおぼえしか

この記述から古来多くの研究者が清少納言は肥満体質でハイキングや登山に適していなかったと言っている。この記事だけで肥満体と言われるのは清少納言ならずとも抗議したくもなるだろう。

現代の女性でも十キロ近くの距離を歩

き、さらに二〇〇メートル程度とはいえ山を登るのはかなりの抵抗がある。ましてや、日頃の運動不足。清少納言が音を上げるのも無理はない。筆者もかつて伏見稲荷の山にある上社・中社・下社をまわったことがあるが、とても気軽にスイスイと登ることはできなかった。現代の女性でもなかなか骨の折れる初午の参詣ではないだろうか。

次は「不美人説」。これはかなり根が深い。昔から多くの作家・研究者が「不美人」「不美人」といっている。代表的なものをいくつか列挙してみる。

私は美しい女ではない。それにもう、女のさかりも過ぎた。髪はぬけおちて少なくなり、かもじ（ヘアーピースのこと）を添えているが、地肌は黒く、かもじの毛は赤っぽくて艶がないものだから、あかるいところで見ると、それがハッキリわかって、われながらうんざりする。（田辺聖子一九八三）」

清少納言は、ちょっと見ただけでも不器量で、太りすぎだった。（富樫倫太郎一九九九）

清少納言は、浅黒く、頬骨の高い顔に、無駄な肉がなく、目尻がやや吊り上がっている。薄い唇は一文字に大きい。（瀬戸内晴美一九六六）

その頃の美人の条件は『引き目・鉤鼻』ですから、彼女の目は少し大きすぎます。（三枝和子一九八八）

いかがであろうか。「不器量」と切って捨てる富樫倫太郎から、少しでも表現を和らげようと腐心している三枝和子までさまざまな表現があるが、ここに示した例には相似形の清少納言の姿が浮かび上がってくる。すなわち「清少納言は不美人」で特に「目に難がある」容貌である。

時代を少しさかのぼって明治の頃となると強烈な一言が出てくる。日本文学の研究者である藤岡作太郎は名著といわれる「国文学全史」（一九〇五）の中で次のように言及している。

思うに清少納言は蛾眉朱唇、花の姿あるにあらず、……鏡中の影に山鳥ならぬ木菟（みみずく）の、己が姿を喜ぶ能わざりしなるべし

これを見ると明治の頃から「美人ではない」ことは既に天下の国文学者のお墨付きであったのだ。「いや、清少納言に藤原斉信や行成は好意をもっていたのではという意見もあるが」といった上で「かれらが清少納言を愛するは、その才識をめずるものにして、その容貌を愛するにはあらず」と藤岡作太郎は断言する。「こんな生意気な女が美人であってたまるか」といった勢いだ。さすが明治の人というべきか。当時の多くの日本文学者、もちろん男性だが、そんな藤岡大先生の御説に「我が意を得たり」と小躍りして喜んだのであろうか、「不美人どころか醜かったようだ」とか「清少納言の肖像を描こうとした画家が、ありのまま描いたんでは醜く描いたと悪評が立つと彼女の後ろ姿を描いている」とか言い立てている。そして、その説を述べるにあたっては「枕草子」の一節を証拠としてあげるのが常であった。ただし、驚くほど情報は少ない。実は「枕草子」全体では四カ所ほどしかない。煩わしいかもしれぬが、全部あげてみることとする。なお、段数は岩波文庫による。

①「識の御曹司の西面」（四九段）

行成の発言「目は縦ざまにつき……思はしかるべし」が清少納言の要望を暗示している。また行成に「いみじうにくければ（私はとても憎らしい顔していますから）」と言って顔を隠している。

②「返る年の二月二〇日余日」（八三段）

斉信に面と向かい「いとさだ過ぎ（ひどく女の盛りを過ぎ）ふるぶるしき人の（古びた女で）髪などもわがにはあらねばにや（髪なども自分のではないからだろうか）、所々わななき散りぼひて（所々がちぢれ乱れて）」とあり妙齢を過ぎて「かもじ」（ヘアーピース）を添えていたことを認めている。

③「宮にはじめてまゐりたるころ」（一八四段）

定子中宮の「葛城の神もしばし（醜いのを恥じて昼間は顔を出さない葛城の神といっても、もう少しいなさい）」が清少納言の容貌の醜さを暗示している。「ふりかくべき髪のおぼえさへ、あやしからむ（ふりかけて顔を隠すべき額髪のありさまもみっともないだろうと思う）」と、髪への自信のなさを述べる。

④「関白殿二月二一日に」（二七八段）

積善寺での供養当日、伊周らに見守られて車に乗り込む際に「汗のあゆれば（汗がにじみ出ているので）、つくろひたてたる髪なども（きれいに整えた髪なども）、みなあがりやしたらむとおぼゆ（みな逆立っているだろうと感じられる）。」とあり、下りる際にも「つろひそえたりつる髪も（かもじを入れて整えてある髪も）、……あやしうなりたらむ（妙な格好になっているだろう）。色の黒さ赤ささへ見え分かれぬべきほどなるが、いとわびしければ（髪の色の黒さ赤さまで見分けられてしまうに違いないほどの明るさであるのが、とてもやりきれない感じなので）」とあり、髪への自信のなさを述べている。

以上が「枕草子」研究の専門家が見つけた清少納言自身が作品の中で述べている自らの容姿の美醜に関わる記述のほぼすべてである。当時の貴族たちの日記には清少納言の記述は見られないから、彼女が不美人だという評価は、おおよそ右の四つの記述から出たものといえる。

藤原行成は書をよくし三蹟の一人として有名であるが、清少納言とは冗談めいた短歌をやりとりするほどの親しい関係であった。また、定子中宮はいたずら好きで笑いの絶えない明るい女性であった。このことから考えると筆者には「目は縦ざまに」とか「葛城の神」といった話は親しい者の間で交わされるジョークとしか考えられない。とはいうものの清少納言は「②」「④」から分るように自分の髪について自信がなかったようである。髪の豊かさこそが美人の何よりの条件であった時代である。自分の髪が薄いのは気の強い清少納言でもかなりこたえていたのかもしれぬ。ただし彼女が髪について劣等感を持っていたかもしれないことの傍証はないこともない。頭髪の量が親子

の遺伝だけで決まるとは限らないが、清少納言の父親である清原元輔について「今昔物語」におもしろい記事がある。「清原元輔、賀茂祭に一条大路を渡る語」（巻第二十八第六）である。

元輔が内蔵助になったときであるから、康保四年（九六七年　たぶん清少納言は一歳のとき）のこと。元輔は六〇歳であった。

賀茂祭（今の葵祭）の奉幣使（朝廷のお供え物を神社に奉献する使者）となった元輔が見物人でごったがえしていた一条大路を取りかかった。そのとき彼を乗せていた馬が何かにつまずき、元輔はまっさかさまに落ちた。元輔はすばやく起きたが、なんと冠が落ちたままであった。当時、冠・烏帽子を落としたり、忘れたりすることは最大の不格好であり不作法である。しかし、元輔は冠を拾ってつけようともせず、見物人に対して言葉を尽くして落馬のやむを得ぬわけを説明し、古今の落馬の例の著名なものをいくつもいくつも指折り数え歩いた。大演説の結びは「されば……咲（わら）ひたまはん君たち、返りて烏呼（お）なるべし（だから……私をお笑いなさったあなたたちはかえって馬鹿者というべきだろう。）」であった。これを見聞きしていた「大路の者」はその場でみな腹を抱えて笑い騒いだ。理由は元輔の姿である。「髻（もとどり）つゆなし。」髻は髪を頭上で束ねた部分。つまり、頭髪がまったくなかったのである。そのため「夕日の差したるに、頭はきらきらとあり。いみじく見苦しきこと限りなし」というありさま。スキンヘッドをキラキラと輝かした爺さまがやくたいもないことを長々と言った姿がおかしてたまらず路上の人々は大笑いしたのであった。

筆者がひょっとしたら清少納言が髪の少ないことに本当に悩んでいたのではないか、という唯一の傍証はこれである。傍証といっても、この記述の主人公である清原元輔の死後ずいぶんたってから「今昔物語」ができているので、はたして真実であったかどうかについてはまったく保証はできない。結局、「髪の量が少なかった」という説の真偽もよくて五分五分といったところか。なお、清原元輔に多少は頭髪があったという説もあり、有力な根拠としてはまったく頭髪がなかったら冠をそもそもつけられないではないか、というもの。多少はあったか、なかったか。読者の想像に任せる。

以上、清少納言が「肥満体で不美人」という説の根拠についてあれこれ書いてきたが、彼女が肥満体ではまずなかったろうし、容貌が美しくなかったなどと断定することはまず困難。彼女は自分の髪について劣等感を抱いていたかもしれない、といったところが今いうことができる精一杯のところだろう。

では、晩年の零落ぶり、そして「肥満体で不美人」と、なぜ清少納言がここまで言われなければならないのか。多くの人々が語ってきたように紫式部が「紫式部日記」の中で書いた清少納言への批評が後代の清少納言の評価やイメージを決定づけたのではという説に筆者も今のところ同意するほかはない。つまり、「清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人（清少納言ときたら、得意顔でとんでもない人だったようでございますね）。……そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよく侍らむ（中身のないことを書きまくり、その中身が空っぽになってしまった人の成れの果ては、どうして良いものでございましょう）。」という紫式部のキツイ一言が後代の清少納言の評価やイメージを決定づけたのではということ、また当時の女房の多くが迎えた晩年のありさまが背景にあったのではということぐらいで今は満足するほかはないのである。しかし、それでも胸にくすぶるものもあるので今後すこしばかり書き進めていきたい。

《補足》

◇　「開（つび）」について

十一世紀頃の一般的な女性器の名称は「つび」「くぼ」であったらしい。それよりずっと以前の「古事記」の記事では「ほと」が使われ「富登」「蕃登」「保止」「陰」などの漢字があてられている。おもしろいのは「ほと」が男女共通の性器の一般名称として使われたこと。十世紀初頭に成立した我が国最初の百科事典「和名類聚抄」には男女両方の性器のことであると書かれている。また神様の名前にも使われた。「古事記　中巻」に出てくるその神様、それも女神の名前は

富登多多良伊須須岐比売命（ほとたたらいすすきひめのみこと）

という。これからすると七世紀頃までは性器名を口に出したり文にしたりすることは恥ではなかったらしい。

もちろん、時代が下るにつれて男女の性器の名称は別のものとなり、その使われ方にも差が生まれた。男性の方は「玉茎」「まら」「はぜ」「なんこん」「ふぐり」「そひ」と多様にあり、しかも「今昔物語」二十八巻二十五話「弾正弼源顕定、マラを出して咲（わら）はるる語」があるように、その使用にタブー視といったことは感じられない。その一方、女性の方は「つぼ」「くぼ」という語は仮名文学の中にはほとんど見えず、わずかに「宇津保物語」に数カ所見えるだけである。十世紀頃には貴族層や知識人の間では女性性器を口に出したり文にしたりすることはタブー視されていたようである。

伏見稲荷の初午参り

伏見稲荷は平安時代の説話や日記では男女の出会いの場とされていることが多い。それは稲荷の神が男女の結び神、性愛の神とされていたからである。十一世紀中頃成立の「新猿楽記」には性狂いの老女が登場する。その老女が二十歳年下の夫の愛を取り戻すために近郊の性愛神の祭と聞けばどこにでも飛んでいって諸物を奉納して祈願する場面がある。その中に、

野干坂（きつねさか）の伊賀専（いがとうめ）が男祭には、蚫（あわび）苦本（くぼ）を叩いて舞ひ、稲荷山の阿小町が愛法には、鰹破前（がつおはぜ）をうせって喜ぶ。

とある。「野干坂の伊賀専」とは稲荷山の坂のこと（一説に京都市左京区松ヶ崎

北の坂ともいう）で「とうめ」とは狐のことである。「蛇苦本」すなわち女性の股間を叩いて舞う、の意である。稲荷山の阿小町も狐に関係があるらしく、愛法とは愛染法の修法で愛欲を祈願する祭があったようである。その祭では鰹の破前、つまり男性の性器に見立てた鰹を弄んで喜ぶ、とある。

もちろん伏見稲荷は「稲なり（稲が生った）」という農耕神としての神格を持った山城国土着の神である。古来、わが国には男神と女神とが婚し穀物神を産み出すという農耕の神話があり、農耕神としての稲荷神社の行事の中に男女の性愛に関わるものがあったのであろう。

以上のことから少なくとも平安時代では伏見稲荷の二月の初午詣は男女ともに相手を求める場となっていた。「今昔物語」二十八巻一話「近衛舎人共稲荷に詣でしに、重方女に会へること」は日頃浮気ばかりしていた夫が伏見稲荷の二月詣の場で自分の女房に懸想して言い寄り、おまけに女房の悪口までも並べ立てたので、女房からしこたまやっつけられた話である。同僚の目前で夫も浮気現場をとらえた妻の行為も痛快だが、夫を引っかける場面で「かつての夫が亡くなったので、頼もしい男を求めてここに来たから、あなたが真面目に思っているなら住所を教えてもいい」と答えている。伏見詣が男女ともに相手を求める場となっていたのである。もう詳しくは述べないが自分に対する夫の愛が冷めつつあった「蜻蛉日記」の作者も稲荷詣をしており、日記の中に夫の愛を求める歌を残している。

平安時代における伏見稲荷への人々の信仰について書いたが、二月詣で男女が入り乱れごった返していた伏見稲荷に清少納言が一大決心をして出かけた理由は何か、よく分らない。「枕草子」を読む限りモテモテ女であった清少納言が「頼もしい男性」との出会いを求めて行ったのではないのは確かだと思うのだが、勝手な妄想はそこまでである。

◇　摂関期の不美人のイメージ

平安時代の美人の条件は髪の毛が豊かで長いことであった。この点、清少納言はかなり不利であったが、容貌についてはどうであろうか。本文中で述べたとおり容貌については「目は縦ざま（目はつり上がっていて）」ということぐらいしか「枕草子」には書かれていない。確かに「源氏物語絵巻」で見る限り「引目かぎ鼻」、つまり目は横に切れ長で鼻は小さく中央にちょこんとかわいらしく存在しているのが、美男美女の条件であったらしい。ただし、これは誰もがうらやむ美男美女のこと。摂関期の「不美人」の記述を紹介して、そのイメージを確認し、清少納言の「不美人」について検討してみたい。

まず「源氏物語」。ここには文学史上有名な不美人が登場する。その名も「末摘花」。皇族の娘であったが、落ちぶれた生活をしていた。契りを結んだ光源氏が雪明りで見た容貌を「源氏物語」では次のように書いている。

まづ居丈の高く、を背長に見え給ふ（座高が高く、胴長に見えなさる）

当時の姫君は立つことなどはしないので、かなりの座高の高さであったろう。

あなかたはと見ゆるものは、御鼻なりけり（ああ、みっともないと思われたのは鼻であった）。……あさましう高うのびらかに、さきの方少し垂りて色づきたる（あきれかえるほど長く伸びていて先の方は少したれていて赤くなっている）

芥川龍之介の小説「鼻」の主人公と同じような鼻をしていた。しかも先は赤い。

色は雪はづかしく白うて眞青に、額つきこよなうはれたる。下がちなる面やう……（顔色は雪が気おくれするほど白く青みを帯びて、おでこは広々として、下の方が長く見える顔立ち……）。

色白でも青味がかっているのは血色が悪い証拠である。末摘花は面長で大きな顔であった。今でも同じであるが、絵巻物に書かれている女性たちはほとんどが「小顔」である。

痩せ給へること、いとほしげにさらぼひて……（お痩せになっていることは、いかにも気の毒なほど骨張って見え……）。

ガリガリに痩せていたのである。当時は少しポッチャリとした方が美人とされたようで、絵巻物には骨と皮だけの女性はまず書かれない。

つぎに不美人の表現として極めつきの文章を紹介しよう。作者はいつぞや出てきた藤原明衡。彼が書いた「新猿楽記」にその記述はある。拙訳で紹介する。

十三番目の娘は酒かすやヌカのような大変に粗末な娘である。とても醜い娘なので人に見せられるものではない。……その娘の姿といったら頭髪は乱れ、額は狭く、歯並びは乱れ出っ歯で、顎が長い。耳が下にたれていて、顎骨が太い。

どのような顔か想像がつくだろうか。頭髪、額、顎、顎骨が長い、つまり大きな顔あたりが不美人のポイントだろうか。

明衡の記述はこの後にも、骨高の頬、曲がっている鼻、湾曲した背中と鳩胸、蛙腹、扁平な大足、短い首、鮫肌、腋臭、熊手のような手など、頭のてっぺんから爪先まで、強烈な描写が延々と続く。そして、とどめは「紅をさしても猿の尻」である。不美人はいくら化粧をしても不美人なのである。現代なら間違いなくセクハラであろう。

以上、二つの例を示したが、いずれも「目」そのものについての記述はない。清少納言に対して言われた「目は縦ざま」が不美人の条件として当時の人々の一般的な常識とするには無理があるのではないか、と思う。

◇　清少納言の父、清原元輔のこと

「今昔物語」で清原元輔のエピソードについて書かれていることは本文で述べたが、元輔自身の人柄について書かれた部分を書いておきたい。本文中に引用した「今昔物語」巻第二八第六の末尾にある作者の「まとめ」にあたる部分であ

る。

此の元輔は、馴れ者の、物可咲（おか）しくいひて、人わらはするを役とする翁にてなむありければ、かくも面なくいふなりけりとなむ、語り伝へたるとや。

現代語訳をすれば次の通り。

この元輔は老練なしたたか者で物事を面白くいって、人を笑わせることをおのれの役としている翁であったので、このように臆面もなく言いまくったのだ、と語り伝えたとか。

この記述からいくと清原元輔は有数の歌人でありながら「お笑い芸人」のようであり、機転のきくことは娘の清少納言と同じであったということか。平安後期に書かれた歌論書「袋草紙」には次のようなエピソードが載っている。知り合いの歌人であった平兼盛が毎度苦しみ沈思黙考して歌を詠んでいたのに対して清原元輔がいった言葉。

予は口に任せて之を詠み、読まむと思ふとき、歌を深く沈思す。（私は歌を口にまかせてふつうは詠んでおり、特によい歌を作ろうと思う時、歌をどう作るか深く考えます）

これを聞いた兼盛がどのような顔をしたか。元輔は軽い冗談のつもりで言ったのだろうが、剽軽（ひょうきん）というよりも軽率な一言のように聞こえる。何となく娘の清少納言も口に出しそうでおもしろい。

我がおくのほそ道の旅（6）

成瀬　和之

酒田では、俳句仲間となごりを惜しんで、滞在を延ばしながら、これから向かう北陸道の空を遠く仰いだ。はるかに遠い旅路を思い、胸に不安をよぎらせながら、加賀の府（金沢）まではおよそ五二〇キロもあると聞いた。

鼠の関（念珠が関。山形県鶴岡市）を超えると、越後の国（新潟県）である。気分も新たに歩みを進めて、越中の国（富山県）市振の関（新潟県糸魚川市）に着いた。ここまでの九日間で、暑さや雨にやられて疲労困憊、持病が起こったので、記録もつけなかった。

文月や六日も常の夜には似ず

（もう七月。明日は七夕という。その前日の六日の夜、ここ直江津は、普段と違った華やいだ祭りの気分があふれている。）

荒海や佐渡に横たふ天の河

ふたたび酒田に戻って、幾日か滞在した後、海岸沿いに、越後から越中の国市振の関に歩を進めた。省筆が目立ち、芭蕉に長旅の疲れが見えてきたが、この間に、「おくのほそ道」隋一の絶唱「荒海や」の句の着想を得た。

「北陸道（ほくろくどう）」は、古代の国道で日本海に沿った幹線道路。若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の七か国、現在の福井・石川・富山・新潟の四県に通じる街道。「ほくりくどう」とも。別に「越路（こしじ）」とも呼ばれた。

「市振の関」（新潟県糸魚川市）の所在地を、越中の国（富山県）としたのは芭蕉の勘違いだろうとされる。（『おくのほそ道』角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス日本の古典）

芭蕉と曽良が出羽をあとにして越後に入るころ、季節は晩夏から初秋へ変わりました。初秋の旧暦七月（文月）は七夕の月です。

越後の旅について芭蕉は詳しく書いていません。しかもいきなり越後の西のはての市振の関へ飛び、そこで越後で詠んだ七夕の句を二句出しています。それはなぜか。

七月七日の七夕は星が恋する夜です。この夜、天の川をはさんでまたたく織姫（琴座のベガ）と彦星（鷲座のアルタイル）が天の川をわたって出会います。そこで「文月や」の句は七夕の当夜だけでなく前夜六日の夜空もただならぬ星の恋のときめきに満ちているというのです。

「荒海や」の句は四十六歳の芭蕉が、元禄二年（一六八九年）七月四日、「奥の細道」の旅の途中、越後出雲崎（新潟県三島郡出雲崎町）でみた光景をもとにして詠んだ句です。

目の前に荒海がある。暗い海上のはるか彼方に流人の悲しみを数々秘めた佐渡ヶ島がある。仰ぎ見ると空には天の川が冴え冴えと横たわっている。近くに、遠くにそして天空に広がる大自然、この雄大さに比べれば、そこにたたずむ人間がいかに小さなものか、人の哀れさを誘うものがある。とりあえず、このように訳することができます。

実際に京都から北陸道を旅してみると、「北陸道」は、「市振の関」を過ぎ、「親不知」に出くわします。「親不知」は、断崖絶壁の下にある海岸線に沿って進まねばならず、古くから北陸道最大の難所として知られてきました。波間を見計らって狭い砂浜を駆け抜け、大波が来ると洞窟などに逃げ込みますが、途中で波にのまれる者も少なくなかったと言われます。今でこそ、トンネルや陸橋の連続する北陸新幹線とか北陸自動車道で、この難所を難なく通過することができますが、昔の「北陸道」はリアス式海岸を海沿いに歩まねばならなかったのです。

ここを通って順徳天皇、日蓮、日野資朝などが佐渡に配流され、親鸞も越後に流されています。もう二度と都には戻れないとの思いにとらわれたことでしょう。島に流された人たちはこの荒海に隔てられた肉親の人々をどんなに恋い慕いながら、あの星の橋を仰いだことでしょう。

若いころ、南アルプスの北岳に登ったことがあります。富士山を目前にみる日本第二の標高の山です。そこでみる天の川は、さえぎる光もなく、文字通り「星の大河」に見えました。電気もない芭蕉の頃には、やはり「天の川」は「星の大

河」に見えたことでしょう。

現代とは違う、当時に思いをはせると、さらにこの句を深く鑑賞することができるのではないでしょうか。

「荒海に横たふ佐渡や天の川」だったら、荒海には佐渡が横たわり、夜空には天の川がかかっているという出雲崎からの眺めそのままの景色を詠んだ句にすぎません。そこで芭蕉は「暑き日を」の句でしたように、切れの位置を大胆に変えて「荒海や佐渡に横たふ天の河」にしました。

長谷川櫂さんによると、この切れの操作で「横たふ」の主体は佐渡から天の川に変わり、句もただの風景の句から荒海と天の川をつつむ壮大な宇宙の句に生まれかわりました。

次の市振のくだりでは二人の遊女とのめぐりあいが待っています。芭蕉は二つの七夕の恋の気配をそのまま遊女との句出会いの場面へとつなげたかった。とくに「荒海や」の句の描く壮大な宇宙の片隅にある市振の宿で遊女とめぐりあったとしたかったのです。そこで越後の旅については多くを記さず、七夕の二句だけを示したのです。空白には空白の意味があります。

「荒海や」の句は、越後の旅を代表する一句、「おくのほそ道」きっての絶唱と言えます。

参考図書：NHKテキスト「おくのほそ道」（長谷川櫂）

米国紀行（6）

河原林　成行

さらば愛しのボルチモア

Sep,14.1997

今回は、いろんな人達や風景と出会い、人の大切さや、大袈裟に言うと、生きることの面白さを教えてくれたボルチモアについて書きます。どこの国、世界へ行っても人情というものは、必ずあるもんですね。

五月四日（日）、快晴。

今日は、いろんなことがあり、ようやく馴染んで来たボルチモアを後にし、チョット期待と不安の巨大都市ニューヨークへ移る日です。

ボルチモアのボルチモア・ワシントン国際空港からニューヨークの全米オープンテニスのコートでも有名なラガーディア空港までほんの一時間のフライトです。

昨日のネディーン&ジョンの結婚式と披露宴の余韻もあって、ふと午前三時に目が覚めてしまいました。見知らぬ土地でレフコビッツ夫妻と気心が通じ、彼らから受けた親切と好意にいたく感動し、目が覚めたのかも知れません。

それとも、体はまだ米国時間と日本時間をウロウロしているのでしょうか。

今日、八時三〇分には、今や住み慣れてしまったこの「ザ・コンフォート・イン」へ迎えに来てくれます。いつか当地へ行かれるときは紹介・案内しますよ。スッカリ土地勘や人勘も出来ましたので。今でもこのままスッとタイムスリップ出来そうです。

せっかく目が覚めてしまったので、レフコビッツ夫妻に我々の気持ちをメモにして渡すことを思いつきました。妻はグッスリ眠っています。

レフコビッツ夫妻がもっと若ければ、こういう感情は起らなかったかも知れません。

しかし、あと、彼らと会えるのは八時三〇分から十時三〇分頃までの二時間ほどだけなのです。

下手な英語（poor English）でシステム手帳のリフィルに簡単なメモを書きました。また、ここに泊まっているハズのネディーンにも「素晴らしい式でとてもよかったことや皆さんに会えてよかったこと、こんな機会に招待してくれたご両親への改めてのお礼、それに日本で会う約束」のメモを書きました。

メモを書いてウツラウツラしていると、早いもので、もう六時になろうとしています。

妻も起きだして来たので荷物を片付け、出発の準備にかかりました。

二人で、「面白いトコやったネ。もう一度来たいネ。また、ネディーンに頼んどこう」などと言いながら準備完了です。窓から見えるハイウエイを走る車もまだパラパラです。

八時になったのでチェックアウトにフロントへ行きます。途中、依然として咲き誇っているあの「花みずき」の前で写真を撮り、別れを告げて、昨夜の雨の残った道をフロントへ行きます。

フロントでは、チップも少々使いましたが、スッカリ馴染みになった若い黒人女性にチェックアウトを頼み、早朝に書いたネディーンへのメモも渡すように頼んでおきました。

横に置いてある軽い朝食のパンとコーヒーを食べながら、「もう多分ここへ来ることもないだろうな」と思い、ここにとっては日常風景の写真を撮ったり、チョット感傷にふけったりしていました。チェックインした時には古ぼけて見えた時計や電話などが今は、イキイキと懐かしく見えて来ます。全くの異邦人だった黒人受付嬢も若いキュートな親しい女性に見えるから不思議です。三泊、二人で二一・七七ドルでした。約三万円也です。

約束の八時三〇分にレフコビッツ夫妻が迎えに来てくれました。受話機を肩で支えて見送ってくれるフロントの若いキュートな黒人受付嬢に、「Thank you. Bye. Bye」と言って外へ出ました。

レフコビッツ夫妻に、「Good Morning. Thank you for your kindness.」と言うと昨夜と同じく、「This is our pleasure」と口を揃えて言ってくれます。

車は〝出口２０〟から森を切り開いたBelt Way 695にのって、ボルチモア・ワシントン国際空港へ向かいます。

森を切り開いた道ですから、ドイツなどと一緒で特に景色がいいわけでもなく、映画「コンボイ」にも出てきたようなごっついトラックなどが珍しく見えるだけです。車の中で、Mrs.Lefkowitzに「あとで読んでください」と言って、早朝に書いたメモを渡しました。

ハイウエイ（自動車専用高速道路）をユックリと三〇分ほど走って、九時過ぎにボルチモア・ワシントン国際空港へ着きました。

来た時は夕方でもあり、そう思わなかったのですが、大きなAirportです。飛行機会社ごとにテリトリーがハッキリ分かれ、駐車場までそれに合わせてあります。

我々は、「US Air」の広いテリトリーに入り、Mr.Lefkowitzが「十時四〇分発のニューヨーク行き」の便の搭乗手続きを済ましてくれます。彼らもニューヨークへ行くときは同じルートを使うので、よく知っているのです。

日曜日の早朝であるせいか、人も少なく、売店などもほとんど閉まっています。まだ出発時間まで一時間半以上あるので喫茶店へ入ることにしました。

今朝は「ザ・コンフォート・イン（The Comfort Inn）」で少しパンをつまんだのですが、彼らが「我々の分だけ」注文してくれたので頂くことにしました。Mr.Lefkowitzは心臓かどっかが悪く、食事制限しているのです。

我々の乗るのは、彼らの言うプロペラの「ビーチクラフト機」で、よく揺れるそうです。「スリルがある」そうです。

また、「ニューヨークは寒いから」と言って、妻にはスカーフを、私にはせっかくだけどダボダボのセータを「返さなくていいから」と言ってくれました。本当に、「なぜここまでしてくれるのだろう？」と思うほどよくしてくれます。親切以上のものです。

いよいよ搭乗が始まりました。搭乗口で、Mrs.Lefkowitzが、私が車の中で渡したメモを「読んでもいいですか？」と言うので、「どうぞ。簡単ですが、我々の気持です。」と言いました。読み終わるや彼女は目を潤ませて、「ありがとう。すぐにまた来て下さい」「是非またお会いしたい」と言ってうつむいたまま、メモを夫に渡します。彼も、口癖なのか「ありがとう。This is my pleasure. We want to see you again,soon」と言ってくれました。

なんとも去り難いのですが、思い切って妻の手を取って搭乗口へ入っていきました。

こういうのを「後ろ髪を引かれる」と言うんでしょうネ。

ニューヨーク行きのUS Air機は、「ビーチクラフト機」と言うだけあって、五〇人乗りくらいの小さなもので、Airport内を歩いて飛行機まで行き、タラップを登って機内へ乗り込むのです。我々の席はたまたま送迎デッキの方の窓側でした。レフコビッツ夫妻がまだ見送ってくれているのが見えます。妻は下を向いて泪しています。

いい国の、いい街の、いい人達にたまたま出会うことができました。こんな経験ができるとは、出発前には思ってもみませんでした。来てよかったと思いました。

滑走して離陸する飛行機の加速度を感じ、機体がフワッと地上を離れていくのを感じたときに、心を込めて、「さらば、愛しのボルチモア」と思いました。本当にまた来たいと思います。もっと英語を勉強して。

美しい「花」がある

大江　雉兎

花の季節は一段落したところだが、今回は花をめぐる言葉から始めてみたい。前回の記事でご登場を願った繋がりで小林秀雄の言葉である。

美しい「花」がある、「花」の美しさという様なものはない。

言葉の出典は昭和十七年に発表された「当麻」というエッセイである。細部が微妙に違う表現がネット界隈で紹介されているので、もしかすると他のエッセイでも同趣の言葉を用いているのかも知れないが、私が確認できたのは「当麻」においてである。そして感想を求められるなら躊躇わずにこう言うだろう。「相変わらずわかりにくいことを言う人だな」と。某アニメ作品で使われた印象的なセリフだが、それはさておき、小林秀雄の他のエッセイ同様に分かりづらさが前面に立っていることは否めない。文脈を踏まえて考えるとすれば、これに先立って『風姿花伝』から「物数を極めて、工夫を尽くして後、花の失せぬところを知るべし」との文言が引用されている。これに続けて「美しい『花』がある」云々とくるわけだ。

ということで、まずは世阿弥の説を確認せばならない。手許の『風姿花伝』を開くと、小林秀雄が参照したものとは底本が異なるのか、当該の文言は「物数を尽し、工夫を極めて後、花の失せぬ所をば知るべし」となっている。細部には目をつぶっておいて大雑把に解釈すれば「たくさんの演目をマスターして技を習得すれば、花が消えないことを知るだろう」といったところか。世阿弥の言う「花」が抽象的な概念なので困りものだが、「当麻」の中では梅若万三郎の能楽を鑑賞した際、シテの老尼の所作に魅入られたところから思索を巡らせる、そしてその後に件の文言が導かれる。したがって小林秀雄の言う「花」は能楽を念頭に置くものであり、世阿弥の「花」と重なることは間違いない。植物の花を直裁的に指すものでは決してない。

以上のことを確認した上で、改めて小林秀雄の、

美しい「花」がある、「花」の美しさという様なものはない。

を掲げるのだが、この言葉は小林秀雄が残した有名な言葉としてカウントされていて、名言集と銘打って紹介するサイトではよく取り上げられている。またそうした企画物とは別に、この文言の意味するところを丁寧に吟味することもたびたびなされている。ただ、そうした試みの中には、能楽と切り離してしまっているものも少なくない。言葉が文脈から切り離されて一人歩きしているのである。

確かに箴言的な響きもあるので、文脈に依拠する解釈だけが絶対的に正しく、それ以外はすべて悪と決めつけるのも偏屈すぎる。そ

れに構文的な視点を持つならば、キーワードである「花」を伏せ字にしても通用しそうな気配である。つまり、

美しい○○がある、○○の美しさという様なものはない。

という基本形を最初に提示しておき、○○に「花」ではないもの、たとえば「絵画」だの「景観」だの「言葉」だのを放り込んだとしても、それぞれに解釈は成立してしまいそうな雰囲気なのである。

そうした言語遊戯を演じてみせた一例として澁澤龍彦のエッセイを挙げてみよう。フランスの哲学者、ジョルジュ・バタイユの初期著作を論じる文章の一節で『花は美しい』という観念論を、バタイユはひっくり返さなければ気がすまないのである。『美しい花がある、花の美しさというようなものはない』という、日本の批評家の有名な言葉があるけれども、観念論のきびしい拒否という意味では、両者の論理に一脈通じるものがあると見てよいかもしれない」というくだりである。バタイユの文章は、外面が美しい花でも花びらをむしり取った後には汚らしさしか残らないし、好意的にみても「悪魔的な優美さ」か「頽廃した人間的倒錯」を感じさせるとするものである。澁澤はそうしたバタイユ独特の視点を観念論の否定と捉え、かの箴言を引き合いに出す。この文脈に出てくる「観念論」がどういうものかが分からないと、面倒くさい哲学上の用語をいたずらに弄んでいるように思われるかも知れない。そこで乱暴すぎの誹りもあろうが簡単にまとめるなら、善とか美とかのような観念的にしか認識できないものを価値判断の基準に据える考え方、としておく。この発想に立てば、崇高なる神の導きには服従せねばならないとの教義もその根拠が問われることなく判断や行為の出発点となる。そして、それと同じように「花は美しい」ということが絶対不変の真実として認識されることになる。こうした形で「花は美しい」を既定事項とすることに抗ったのがバタイユの反観念論であると澁澤は評し、小林秀雄の言葉をその文脈に組み込むのである。ちなみにジョルジュ・バタイユと小林秀雄はおおよそ同じ世代になるのだが、バタイユの著作が翻訳され、さかんに紹介されるようになったのは戦後になってからであり、若き日の小林秀雄がバタイユの思想と接点を持っていたか否かはわからない（なかったと思う）。

ともあれ、このように澁澤のエッセイでは、小林秀雄が意図していた能楽がらみの文脈は切り捨てられている。しかし本来の対象が世阿弥的「花」（＝完成された能楽の所作に表現される美）であろうが植物の花であろうが関係なく、反観念論という枠組みに収めなおすときれいに落ち着いてしまうのも事実である。小林秀雄のかの言葉が箴言となって一人歩きしているのも宜なからんといったところだろう。

孫ウォッチング（18）

福田　圭

昨年の大雪でできた鳥取砂丘の「オアシス」が、この記録的な暑さで、干上がり、消えてしまっていた。わずかに、その後に草が生えているのが残っているだけである。はかない「オアシス」であった。

五月二十九日（月）光ちゃんに会いに行く。生まれて十九か月目になる。体重が十三キロになっている。スプーンを使って、ご飯が食べられるようになっている。画用紙にたくさん線を引くこともできるようになっていた。

月に一度の出会いでは、「祖父ちゃん」を忘れてしまうのか、やはり人見知りをする。保育園から帰ってきて、玄関からなかなか家に入ろうとしない。

色々と遊びを持ちかけると、だんだんと笑顔が見られるようになってきた。ボール転がしをする。ボールを受けることは、まだ難しいが、こちらに狙いを定めて、ボールを投げることができる。おもちゃの電車を相手に向かって転がし、受け取ったりする「やりとり」ができる。五つのだるまの積み木を積み上げることも、上手にできるようになっている。一月会わないと、いろんなことができるようになっている。子どもの進歩の早さには驚嘆する。こちらが、はかない「オアシス」同様に、「ほろびゆく草原」なのとは対照的である。

別れ際には、「バイバイ」と言って、ハイタッチで別れのあいさつをしてくれた。次回光ちゃんに会いに行くときには「お兄ちゃん」になっているだろう。「一人っ子」最後の「孫ウォッチング」でした。

編集後記

五月七日に芥川商協会館で「芥川だより」の懇親会を開きました。寄稿されてる方や愛読者の方など十六名ほどの参加者がありました。男の参加者は終始、芥川の元気なおばちゃんパワーに圧倒されていました。また市会議員さんや精神科医の伊藤さんが、女性陣の質問に丁寧に応対されて、市政・医療相談会みたいで大変盛り上がりました。

一次会の後、中華屋さん、カラオケ・スナック、日本料理屋とはしごしました。芥川商店街で飲み食いしたので移動時間もかからず金も安く済みました。大阪や京都まで行かなくても充分芥川で楽しめると実感しました。

別れ際に「来年も会おう」とおばちゃんたちと約束しました。こんな楽しい会はありません。何でもありで好きな事を言っていいのですから。しかも聞いている人は、それぞれの専門家で丁寧に応対してくれる訳ですから、楽しくないはずがありません。

まあ、私の経験から言って、こんな楽しい会は他にはないでしょうね。みなさん太っ腹ですから。来年もしますから是非ともご参加ください。肩書なしで知的好奇心を楽しませてくれますよ。

（嘉）

連載 女９０年の軌跡　眞糀さん

今日は晴れ

これからの世の中すべてを見るのはもう難しいと思う。

けれども平凡な毎日を楽しくするのは自分次第。

じっと家で考えこんでいる位なら、とにかく外に出て行動してみること。

四月末に元気で泳いでいた鯉のぼりも、すっかり片付き子供たちも川の中へ足を入れている。

芥川の水流は、すまして流れていく。

「今日も元気で墓参ってこれたッ」

いろんな事を思い出して一方的かも知れないけれど墓石に話しかけてみる。

竹林に囲まれた数知れない墓石、何百年何千年前のかも、どんな宗教でも、人が死んだらお墓をつくる。そうした事がつづいているということは、きっと理由があるのだろう。やっぱり「墓参りにお出で」ということかな…。お会したこともないご先祖さん。

墓石の前に立つことで、何かが見えてくる。しのぶということで、自分自身も何の役割りもなかったら、つづかないと思う。

環境は自分で努力してつくっていくものなのか…。

お坊さんいわく

「墓石に話してをしている人はじめて見たっッ。でもよいことじゃ、あんたはん、長生きしはりますで」と。

夏が来たのか

道端の花に、垣根の花にも、夏が近づいているようだ。田んぼの畦道に咲く名前も知らない草花が輝きを増して自然の姿に季節の変異を感ずるようになったこと。

愛犬の散歩と近所の小学生の登校時間が一緒になり、入学したての四月には少し頼りなく見えた一年生の足取りもずい分力強くなってきた。大きなランドセルを背負い、まっすぐ前を見て歩く姿が微笑ましく感じるようになった。見送っていた母親に手を振って、大きな兄ちゃん達に遅れまいと走ってゆく。

「ああ、今日もよいお天気ですなァ」とすれちがいだまに挨拶される。耳が聞こえにくいことによって「ああ、ほんとにね」愛想のない返事になってしまって我にかえる。

別にムリに自分を殺したのでもなく自然にそうなったのか。おこっている時は「なんだバカ」悲しい時には「ハラハラと涙する」うれしい時には「うれしい」と表現。

歳を重ねただけでは人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。同じ年齢でも、前を向き進むのか、後ろばかり振り返るのか。

その差は、大きな違いとなると思う。私は、よく年齢を聞かれる。何故か分からない中に、いつも自分に言い聞かせるように、生きている以上「まだ、人生終わっていない」と。

俳句

土田　裕

両国や肩で風切る夏衣
赤が消え白が消え今万緑に
労ひの薫風通ふ杣の道
香を放ち高みに搖れる
　朴の花
麦秋や烏の集ふ里の畑

影山武司

やはらかに風を知りたる柳かな
父母と猫と吾が孫夏逃す
つくばひに雲通りすぎ夏逃す
白雲に力の宿る立夏かな
代田また一枚増えて空広し
嬰児の頬の紅色聖五月
洗ひ立ての
　白きブラウス青葉風
夏椿花落ちて知る咲き始め
わが背丈
　越えし子とをり麦熟るる